

韓湘、この詩を袖に入れて泣く泣く東在に別れにけり。誠なるかな、痴人面前に夢を説かずといふことを、この談義を聞きける人人の思ひけるこそ愚なれ。

この一條に依つて、後醍醐天皇の時分に、昌黎文集が我が國に多少持て囃されて居たことや、朝鮮の或者は、この文集の講義を聞く位の素養のあつたことや、韓湘仙人説が佛者の間などに行はれ居たことなどが推測される。この中、韓愈を以て晩唐の季となし、韓湘を以て韓愈の猶子となせるは、一時檢點の未だ足らざりし筆者の誤であらう。次は、湯淺元禎の常山紀談附録雨夜燈の中なる「稻葉一徹、文學に依つて死を免されし事」の一條で、その全文は、左の通りである。

稻葉伊豫守一徹、織田信長に従ひけれども、信長心解けず、數寄屋にて茶を賜はり、その席にて刺し殺すべしとの巧みなり。一徹、數寄屋に入る時、相伴の三人、挨拶に掛物の繪の讀み給へといふ。これは、韓退之の詩にて、雲横素嶺一家何在、雪擁藍關馬不前といふ句あり。一徹、少し學問ありて、これを讀みけるに、相伴その心を問ふ。一徹、あらあら仔細を咄しければ、信長、壁越しに之を聞き、つと走り出で、一徹には荒勝負ばかりする勇士と思ひしに、今聞くとところ、文學にも達せり、奇特の事、感ずる餘りに、實を語るべし、今日のもてなしは、茶の湯に非ず、其方を刺し殺さむとせし巧みなり、相伴の三人、皆懷劍を差したり、今日より永く我に従ひて、謀を致されよ、ゆめゆめ害心を止めたりと云はれければ、三人の相伴、懷より小脇差を取り出す。一徹

平伏して、死罪を御免され候事、悉く候、私も、内内、今日殺さるべきにて候はひと察し申し候へば、詮方なく、是非一人相手を取り申すべしと存じ、用意仕り候とて、これも懷劍を取り出して信長に見え申しければ、信長、いよいよ、その心がけを譽められけり。

この一條は、大槻磐溪の筆で漢譯せられ、近古史談の卷一にも載せてあつて、その方が、より多く人に知られて居るやうである。信長は、一徹の文學にも達して居るのを感じたといふが、實は、一徹が韓愈の忠諫を説いた其事に感じ、一徹の誠意を酌み取つて、その死を赦したのであらう。何は兎もあれ、韓愈の此詩が、日本に傳はつて、かくの如く、面白い事實を二つまでも構成したのは、まことに不思議な事である。

武關西逢配流吐蕃

武關の西、配流の吐蕃に逢ふ

嗟爾戎人莫慘然。嗟、爾、戎人、慘然たること莫れ、

湖南地近保生全。湖南地は近く生を保つて全からむ。

我今罪重無歸望。我今罪重くして歸る望なし、

直去長安路八千。直に長安を去る路八千。

律詩 武關西逢配流吐蕃

【字解】(一)戎人 戎は西夷、吐蕃は即ち今の西藏、西邊に在るが故に云ふ。(二)慘然 いたまし氣に見える。(三)湖南 今の湖南省一帶の地。(四)歸望 長安に召し歸される希望。

【題義】一統志に「武關は、西安府商州に在り」といひ、唐書地理志には「商州商洛縣東に五關あり」といつて居る。秦嶺山脈の東端に在る關所、唐書吐蕃傳に「吐蕃は、元と西羌の屬、百有五十種、河湟江岷の間に散處す」とある。吐蕃、即ち今の西蔵は、唐代、頻りに入寇したことがあつて、その交渉が頻繁であつた。この詩は、韓愈が潮州に赴く途次、藍田より商洛に出でむとし、武關に差しかつた時、罪を得て配流せらるる西蔵人に遇ひ、同病相憐むの情に堪へず、仍つて賦して示したのである。

【詩意】ああ、汝、西蔵人よ、汝の配流せらるるは湖南で、その地も近く、命に別條は有るまいから、さう慘然として歎き悲むにも及ばぬ。われは、罪科重くして、長安を去ること八千里の彼方、潮州に流されるので、到底召し歸される希望だに無い位、これに比べて、少しは、自ら慰めるが善からう。

【餘論】朱竹垞の評に「苦を借つて苦を説く」とある、まことに簡切にして且つ奇警である。

次鄧州界 鄧州の界に次す

潮陽南去倍長沙。潮陽、南に去つて、長沙に倍す、

戀關那堪又憶家。關を戀ふ、那ぞ堪へむ、又家を憶ふ。

【字解】「長沙」むかし賈誼の貶謫された處、數ば前に見ゆ。

【三】關、關を戀ふ、即ち君を思ふ。

【三】添花、目が霞むこと。

心訝愁來惟貯火。心は訝り、愁來つて惟だ火を貯ふるを、

眼知別後自添花。眼は知る、別後自ら花を添ふるを。

商顏暮雪逢人少。商顏の暮雪、人に逢ふこと少く、

鄧鄧春泥見驛踪。鄧鄧の春泥、驛を見ること踪なり。

早晚王師收海嶽。早晚、王師、海嶽を收め、

普將雷雨發萌芽。普ねく、雷雨を將て萌芽を發せむ。

【一】商顏、商山をいふ、漢書漢書地理志に「魯より洛水を引いて商顏の下に至る」とあつて、顏師古の「注に商顏は商山の顛なり、これを顏といふは、猶ほ人の顛顛のごときなり」とある。

【二】鄧鄧、左傳威公九年に見ゆ、鄧州は邊鄙なるが故に、鄧の字を添へたのである。

【六】早晚、何の時に同じ。

【題義】唐書地理志に「鄧州南陽郡、山南道に屬す」とある。この詩は、武關を過ぎし後、行き行きて鄧州の境に暫時止息せし時に作つたのである。

【詩意】潮州は、ここより南に當つて、その遠きことは、古しへ賈誼が貶謫された長沙の倍もある位。身は旅中に在つて、絶えず君を思ひ、又家を思ひ、まことに堪へられない。されば、愁來る時、この心ひたすら熱して、火を貯ふるかと疑はれ、目は、散散泣き明かしたから、別後愈よ霞んで仕舞つた。商山には、暮雪白く降り積つて、春なほ寒ければ、旅客極めて少く、鄧州は邊僻の地、新泥深く、ぬかるみ勝ちであつて、宿場は中中遠い様に感ずる。今しも、藩鎮、なほ王命に服せざるものがあるが、何時、王師は、盡く之を平定し、海山を收めて一に歸し、そして、雷雨一たび到りて、草木が普

ねく芽を出すか、どうか、さういふ目出たい時に早くめぐり合ひたいものである。  
【餘論】前聯は、稍や刻劃に過ぎて居るが、愁人の所懐を寫し出して、復た餘蘊なき様である。朱竹垞は「湘に示すの作に比すれば、運思細に入り、態、較や濃かなり、然れども、彼の渾然たるに若かず」と云つて居る。

題臨瀧寺

臨瀧寺に題す

不覺離家已五千。覺えず家を離れて已に五千、

仍將衰病入瀧船。仍ほ衰病を將て瀧船に入る。

潮陽未到吾能說。潮陽、未だ到らず、吾能く説く、

海氣昏昏水拍天。海氣昏昏として、水、天を拍つ。

【字解】「五千」五千里の時、將注に「漢書高帝紀、三尺を掲げて天下を取る、及び韓安國傳、本と制の字なし、古しへ、固より此の如く造語するものあり、公、離家已五千といふときは、その里たるを知るなり、或は敬後を以て之を謂るは非なり」とある。

【題義】蔣注に「臨瀧は、韶州の縣名。唐の武德四年に置き、貞觀八年に廢す、今、その地、曲江縣に屬す。公、六卷に瀧吏の詩あり、具さに其詳を述ぶ」とある。しかし、その詩中には、寺の事は見えず、外に地誌の類にも、とんと書いて無いが、矢張、臨瀧に在つたから、土地の名を寺に負はしたも

のと思はれるが、その後、廢絶に歸して仕舞つたのであらう。この詩は、韓愈が韶州を過ぐるとき、臨瀧寺に題したのである。

【詩意】長安を離れて、知らぬ間に、すでに、五千里の遠きに及び、前程は猶ほ遠たるが故に、衰病の身を扶けて、早瀬を下る船に乗り込んだ。潮州は、如何なる處か、自分は、まだ其地に到らぬけれども、その風土は能く説くことが出来るので、見わたす限り、海氣昏昏として立ちこめ、逆巻く水は、空を拍つばかり、まことに物すごく恐ろしき處である。

【餘論】朱竹垞は「妙處、全く吾能説、三字の上在り」と云つて居る。

晚次宣溪辱韶州張端公使君惠書敘別酬以絕句二章

晚に宣溪に次し、韶州の張端公使君、書を惠し別を敘するを辱うし、酬ゆるに絶句二章を以てす

韶州南去接宣溪。韶州、南に去れば宣溪に接す、

雲水蒼茫日向西。雲水蒼茫、日、西に向ふ。

客淚數行元自落。客淚數行、元と自ら落つ、

律詩 題臨瀧寺 晚次宣溪辱韶州張端公使君惠書敘別酬以絶句二章

【字解】「南去」南に向へば。  
【一】雲水 雲と見まがふ水。  
【二】 鷓鴣 南方暖地特産の鳥で、形、母雞に似て、胸骨格隆といふ聲を出し

鷓鴣休傍耳邊啼。鷓鴣、耳邊に傍うて啼くを休めよ。

も、樹葉を以て背上を覆ふといふことである。李白は、宮女如花簪三春殿、只今惟有鷓鴣飛といひ、賈島は、日暮東風春草綠、鷓鴣飛上越王臺といひ、ともに、南方の風土に關したものである。

【題義】 蔣注に「按するに、韶州は潮州を去ること、尙ほ遠し。これ當に元和十四年の夏に在つて作るなるべし。宣溪は、今の韶州府城の南八十里に在り、源、螺坑に出づ」とある。又唐書地理志に「韶州始興郡は嶺南道に屬す」とある。次に、端公は、國史補に「御史相呼んで端公となす」とある。使君は、刺史の尊稱、張名は曙、御史中丞、今、韶州の刺史たる人と見える。この詩は、晩に宣溪に宿りし時、韶州駐在の張御史から、御丁寧にも、手紙を贈つて、餞別の意を述べられたから、これに酬ゆる爲に、絶句二首を作つたといふことである。

【詩意】 韶州から南に向へば、地は宣溪に接して居るが、折から、雲と見まがふ水も、蒼茫として、日は西に向つて、將に暮れむとして居る。相去ること八十里、ここに御出になるのも、容易でないからといふので、態態、手紙を下さつたのは、感謝に堪へぬ次第である。但し、予は、さらでだに、客涙數行、自然に落つる程であるから、鷓鴣が耳に近く啼かうものなら、愈よ堪へられぬから、しばらく鳴くなといつて依頼しつづつある程である。

【餘論】 朱竹垞の評に「如何此時恨、嗷嗷夜猿鳴、郷心正欲絕、何處搗寒衣、皆是此意。これ但だ元自、休傍の四字を加へて、境遂に別然、終に稍や意を著くるを覺ゆ」とあり。

兼金那足比清文。兼金も那ぞ清文を比するに足らむ、  
百首相隨愧使君。百首相隨つて、使君に愧づ。  
俱是嶺南巡管内。俱に是れ、嶺南巡管の内、  
莫欺荒僻斷知聞。荒僻に欺かれて、知聞を斷つこと莫れ。

欺は壓倒される意、荒僻の爲に壓倒される。【三】 知聞 李涉の詩に叢林羸客夜知聞とあつて、音づれる、存問する。

【詩意】 張使君は、さながら兼金の如く、その人物は、純粹にして、且つ文彩に富んで居られる。予は、毎百首位の近作を身に隨へて居るが、愧かしながら、とても使君にも及ばない。しかし、潮州も、韶州も、均しく嶺南節度使の管轄區域内で、さう隔つて居る譯でもないから、荒僻の爲に欺かれ、非常に遠い様に思つて、今後、存問を絶つ様な事の無い様に願ひたい。

【餘論】 筆墨閒錄に「潮州以後の詩、最も哀深、宣溪絶句等の詩、絶だ味あり」と云ひ、唐宋詩醇にも、二首ながら連載してあるが、朱竹垞は「微に俚に近し」といつて、後首の方を斥けて居る。

【字解】 【一】 兼金 一以て他の數倍を兼ねるといふので、金の最も精純なるもの。【二】 清文 無垢にして文彩あること。【三】 嶺南巡管内 嶺南節度使の管轄區域内。【四】 莫欺 荒僻に欺かれてと訓すべし、

題秀禪師房

秀禪師の房に題す

橋夾水松行百步。橋は水松に夾まつて、行くこと百歩、  
竹牀莞席到僧家。竹牀莞席、僧家に到る。  
暫拳一手支頭臥。暫く一手を拳にして頭を支へて臥し、  
還把魚竿下釣沙。還た魚竿を把つて釣沙に下る。

【字解】(一) 水松 水邊の松。  
(二) 竹牀 竹で造つた臥牀。  
(三) 莞席 蘭で織つた席。  
一方の手を拳にする、即ち脇枕。  
(四) 釣沙 釣に適したる沙岸。

【題義】秀禪師は、如何なる人か分からぬが、この排列の順序から云ふと、宣溪附近に房を構へて居て、韓愈が之を訪問したものらしく、その時、房壁に題する爲に、この詩を作つたのである。

【詩意】兩岸には松が生ひ茂り、その間に橋が懸つて居て、その長さは百歩ばかり。これを渡り盡すと、秀禪師の僧房で、竹牀莞席が用意してある。そこで、暫時脇枕をして、寝そべつて居たが、やがて起きて、今度は、魚竿を手にして釣れさうな沙岸に下りて往つた。

【餘論】朱竹垞は「四句四事、清澹絕俗」といひ、四句全く別殊の事であるが、遞次的に關係の有る處が面白い。

將至韶州先寄張端公使君借圖經

將に韶州に至らむとし、先づ張端公使君に寄せて圖經を借る

曲江山水聞來久。曲江の山水、聞き來ること久し、  
恐不知名訪倍難。恐らくは、名を知らず、訪ふこと倍す難からむことを。  
願借圖經將入界。願はくは、圖經を借りて、將に界に入らむとす、  
每逢佳處便開看。佳處に逢ふ毎に便に開いて看む。

【字解】(一) 曲江 唐書地理志に「韶州に曲江縣あり、武德四年、臨瀛・良化の二縣を置きしが、貞觀八年省く」とある。(二) 圖經 地圖の卷物。

【題義】韶州に至らむとするに際し、先づ刺史の張署に寄せて、地圖を借らむが爲に、此詩を作つた。順序の上から云ふと、この詩は晩次「宣溪」の前に在るべきもので、韓愈は地圖を借りて韶州に入つたが、宣溪に宿し、驛路は韶州の治所にかからぬ處から、張刺史にも逢はず、仍つて、刺史から書を寄せて、別意を表したのである。

【詩意】曲江の山水の觀るに足ることは、久しい前から耳にして居るが、前以て、名を覚えて居らぬと、尋ねることが一層六つかしいといふ心配がある。そこで、君から地圖を拜借し、それを持つて、

韶州の界に入らうと思ふ。途すがら、風光佳絶の處に逢つた其度ごとに、その地圖を開きさへすれば、すぐに名も知れて、折角の名所も見落さずに済むであらう。

【餘論】朱竹垞の評に「人皆この意あり、かくの如く寫し來つて自ら妙」とある。大抵、かういふ詩は、遺憾なく言ひ終せてあれば、平淺も亦た佳なりで、それには、自然の根柢を要する。なほ蔣注には「この詩、及び下、韶州留別の詩に至るまでは、皆潮より袁に移る道中の作」とあるが、顧嗣立等の説に従へば、この首及び次の始興江口も、矢張、潮州に向ふ途中で、袁州に移る道中の作は、その次の韶州留別以下である。

過始興江口感懷

始興江口を過ぐ感懷

憶作兒童隨伯氏。憶ふ、兒童と作つて伯氏に隨ひしを、

南來今只一身存。南來、今只だ一身存す。

目前百口還相逐。目前の百口、還た相逐ふ、

舊事無人可共論。舊事人の共に論すべきなし。

は、その後七年を經、即ち十歳の時である。蔣注には「大曆十四年四月、公の兄、起居舍人兼會、鄂を以て韶州刺史に貶せられ、公、會に隨つて遷る、時に年十歳」とあるが、年十歳は善いとして、大曆十四年四月は誤りで、十二年三月、元載、鄂を以て誅せられ、五

【字解】伯氏、伯氏は長

兄、即ち韓會。新唐書の本傳に「愈生まれて三歳にして孤、伯兄會の養に託官さるるに隨ふ」とあつて、三歳で孤となると同時に、南方に移つた様に聞かえるが、南方に移つたのは、

月、韓會は元載に坐して官を貶せられたのである。【二】南來、今次韶州に左遷せられしに就いて南方に來りしこと。【三】百口、百人、家族の多きをいふ。【四】相逐、一緒に旅行するをいふ。

【題義】水經注に「江水西して始興縣南を徑す」とある。江水は、即ち上に見えた宜溪の下流で、始興縣を過ぎて始興江と稱するものと見える。この詩は、その江口を過ぎる時、舊事を追憶して作つたのである。

【詩意】おもひ出せば、むかし、兒童たりし時、長兄の貶謫に伴はれて、この地を經過したことがあつた。四十年後の今日、左遷の厄に遭うて、又しても、南方に來ると、只だ吾が一身の存するのみである。眼前には、百名の家族どもを隨へて居るが、昔その時に居合はさぬもので、むかしの事を共に話すべき人も無い。

【餘論】蔣之翹は「一結、無限の悲愴、人を動かす」といひ、朱竹垞は「道ひ得て真切、鍊り得て簡妙」といつて居る。

韶州留別張端公使君

韶州、張端公使君と留別す

來往再逢梅柳新。來往、再び梅柳の新なるに逢ふ、

【字解】再逢梅柳新、韓愈

律詩 過始興江口感懷 韶州留別張端公使君

別離一醉綺羅春。別離、一たび綺羅の春に酔ふ。

久欽江總文才妙。久しく欽す、江總文才の妙なるを、

自歎虞翻骨相屯。自ら歎す虞翻骨相の屯なることを。

鳴笛急吹爭落日。鳴笛、急に吹いて、落日を争ひ、

清歌緩送欵行人。清歌緩く送つて行人を歎む。

已知奏課當徵拜。すでに知る、奏課の當に徵拜すべきを、

那復淹留詠白蘋。那ぞ復た淹留して白蘋を詠せむ。

五三二  
は元和十四年正月、佛骨を論ずるを以て潮州に貶せられ、三月、潮州に至り、十月、袁州に量移し、十五年正月、袁州に至つて、その往來して韶州を上下する、皆梅柳新なるの時に於てしたから、特に再逢といつたのである。【三】久欽江總文才妙。陳書江總傳に「總、字は總持、能く文を屬し、後主に幸せられ、多く側篇あり、好事相傳へて誦讀す」とあり、同書孔奐傳に「後主、江總を以て、太子詹事と爲さむと欲す、奐曰く、江總は文華の人、太子何ぞ總に藉らむ」とある。何遜門は又説を爲して「南史、劉之遴、かつて總に詩を酬い、深く相欽絶す、蓬城隔り、懸を會稽に遠くるや、總の勇勁勃、廣州に據る、會稽より往いて依る。嶺南に流寓して歲を積み、陳の天嘉四年、中書侍郎を以て徵し還さる。この句、斷草、嶺外の事を用ひ、第七の奏課徵拜と呼應す」といつて居る。【三】虞翻骨相屯。吳志虞翻傳に「字は仲翔。翻、すでに孫策に歸し、命ぜられて功曹となり、出でて富春の長となる。後、騎都尉となり、數に顔を犯して諫諍す。孫權悦ばず、坐して丹陽の溧縣に徙され、後又交州に徙さる」とあり。吳志の注なる別傳に「翻、南方に放棄せられ、云ふ、自ら恨む、疏節骨體細ならず、上を犯して罪を獲、當に長く海隅に没すべし」とある。骨相屯の屯は、屯妻、即ち不運なること。【四】欵行人。欵は留むと訓す、蔣注に「諸本、歎を感じ作る。云ふ、むかし、二宋、この詩を評し、小宋は感の字の誤なるを疑ひ、大宋は、初め以て然りと爲さず。後に善本を得て、はじめて信す」とある。【五】奏課。功課を天子に奏し上る。【六】詠白蘋。前に和ニ席八の詩中に見えて居る。柳惲の詩、汀洲採白蘋一を指して云ふ。

【題義】この詩は、韓愈が潮州より袁州に量移されしに因つて途に上り、復た韶州を過ぎ、今度は刺史張曙に面會し、その去る時、留別の爲に作つて示したのである。

【詩意】去年も、今年も、この韶州を通過し、兩度ともに梅柳はじめて新なる春の頃であり、殊に、今回、別離に際し、綺羅の筵に於て一醉するを得、君の御厚意は、まことに感謝に堪へぬ次第である。君の文才は、古しへの江總の如く、久しく欽慕して居たが、予は、虞翻と同じく、骨相からして、すでに不運に逢ふものと決まつて居るから、致し方ない。今しも、離筵興酣なるとき、笛の音は急に鳴いて、落日を争ひ、清歌の聲は、緩く送つて、旅ゆく人を留めむとして居る。しかし、予は功課を奏上され、やがて、都に召し還されることもあらうから、ここに淹留して白蘋を詠じて居る譯には行かぬ。

【餘論】楊慎は説をなし「退之の張曙に贈るに云ふ、久欽江總文才妙、自歎虞翻骨相屯、忠直を以て自ら比し、しかも、奸佞を以て人を待つ、豈に聖賢己を謙し人を恕するの意ならむや。曙の人と爲りを考ふるに、亦た奸佞江總に似たるものなし、もし文才を以て論ずといはば、何ぞ鮑照・何遜を用ひずして、必ず江總といはむや、これ韓公平生の病處にして、宋人乃ち之を學んで地步を占むと爲すなり、噫」といつて、ひどく攻撃して居るが、これに就いては、何義門の説が一番善い。つまり、韓愈は、劉之遴を以て自ら居り、その引合として江總を出したので、謂はゆる斷章である。これが、鮑照・何遜ならば、南方と何等の關係なく、虚泛殊に甚しいものになるので、楊慎の提説は、折角ながら、取るに足らぬ。そ

れから、朱竹垞は「格平かに、調穩かに、情を寫し、景を點して、皆合拍、これを讀んで味あり」といひ、何義門は「起句再の字、末句淹留の字と反對」といひ、「歎行人、歎の字、諸本感に作る、按ずるに、感に作らば、便ち緩の字と情なし」といひ、その用字の工夫自ら細なることを賞して居る。

量移袁州張韶州端公以詩相賀因酬之

袁州に量移さる、張韶州端公、詩を以て相賀す、因つて之に酬ゆ

明時遠逐事何如。明時遠逐、事何如。  
遇赦移官罪未除。赦に遇ひ、官を移されて、罪未だ除かず。  
北望詎令隨塞鴈。北望、詎ぞ塞鴈に隨はしめむ。  
南遷纔免葬江魚。南遷、纔に江魚に葬るを免る。「むとす」  
將經貴郡煩留客。將に貴郡を経て、客を留むるを煩はさ  
先惠高文謝起予。先づ高文を惠んで、予を起すを謝す。  
暫欲繫船韶石下。しばらく、船を韶石の下に繫ぎ、  
上賓虞舜整冠裾。虞舜に上賓して、冠裾を整へむと欲す。

- 【字解】(一) 明時、聖明の世。
- (二) 遠逐、遠地に放逐せられる。
- (三) 塞鴈、塞上に向つて歸る鴈。
- (四) 韶石、水經注に「始興縣に韶石あり、兩石對峙して雙闕に似たり」といひ、袁州郡志に「韶石は、舜、かつて此に登つて樂を奏す、今廟の在るあり」と見ゆ。韶は舜の創めた樂であるから、名づけたのであらう。
- (五) 上賓、ここでは、舜の廟に參詣すること。

【題義】

唐書地理志に「袁州宜春郡、江南道に屬す」とある。量移とは、善地に移されること。この題は、一に「袁州に量移す、張韶州が先づ詩を寄せて賀するに酬ゆ」に作り、或は「袁州に量移す、張韶州、先づ詩もて賀せらる、因つて之に酬ゆ」に作つてあるが、究極は同一で、袁州に量移されたに就いて、韶州刺史張曙が慶賀の詩を寄越したから、これに酬ゆる爲に作つたといふので、順序からいへば、前の韶州留別の先に在るべきものである。つまり、この詩は、まだ潮州に居る時に作り、それから、愈よ出發し、韶州に於て張曙に會し、仍つて前詩を作つたのである。

【詩意】この聖明の世に際して、遠地に左遷されたのは、よくよくの事で、今日赦に遇うて袁州に量移されたものの、當日の罪科が全く除き去られたといふ譯でもない。北望して、長安の方に向へば、塞上に歸る鴈に隨つて、一緒に行きたいと思ふが、まださうもならず、稍や南方に遷されたが、袁州は善土で、わづかに江魚の腹中に葬られることだけは免れた始末。やがて發程すれば、乾度、貴郡を通過し、随分、お世話に成ることであらうし、第一に佳作を惠まれて、予を起されたのは、感謝に勝へぬ次第である。貴地には、韶石といふ處があるさうだが、しばらく舟を其下に繫ぎ、名だたる虞舜の廟に參詣する爲に、衣冠を整へて上陸することであらうから、その時は、どこか御案内をして戴きたいものである。

【餘論】李光地は「末句、これを離騷の謂はゆる跪敷衽以陳辭に取る、難を蒙り、志を正しうする



の氣象あり」といひ、朱竹垞は「罪未除、最も是れ痛心、北馬南魚、對工にして意切、但だ、頸聯、指事翻つて頰紫、味少きを覺ゆ。點景二句を入るるの善と爲すに若かず」といつて居る。

次石頭驛寄江西王十中丞閣老

石頭驛に次し、江西王十中丞閣老に寄す

憑高試廻首、一望豫章城。高きに憑つて、試に首を廻らし、一たび望む豫章城。人由戀德泣、馬亦別羣鳴。人は德を戀ふに由つて泣き、馬亦た羣に別れて鳴く。寒日夕始照、風江遠漸平。寒日、夕はじめて照らし、風江、遠くして漸く平かなり。默然都不語、應識此時情。默然として、すべて語らず、應に此時の情を識るるべし。

【字解】(一)豫章城、唐書地理志に「洪州豫章郡」とあり、水經注に「漢の高祖六年、灌嬰に命じて、以て豫章郡となし、ここに治す、即ち灌嬰の築くところなり」とあり、歷代の說に「豫章郡、樹、庭中に生ず、故に名づく」とある。(二)風江、風の吹き渡る江水。

【題義】水經注に「贛水の西岸に盤石あり、これを石頭といふ、津歩の處なり」とあり、蔣注に「豫章郡の北に在り、今江西贛州に屬す」とある、王十中丞閣老は、自注に仲舒とあつて、舊唐書の本傳

には「仲舒、字は宏中、太原の人、穆宗即位、召して中書舍人と爲す、出されて洪州刺史御史中丞江西南道觀察使となす」とある。この詩は、元和十五年(秋)韓愈が袁州より召し還された時、石頭驛に次して、王仲舒に贈つたので、仲舒は、この年間正月、はじめて著任したばかりである。

【詩意】高い處に登り、試に首を廻らして豫章郡城を望むと、心緒凄涼として、まことに堪へられない。われは、君の德を慕ひ、しかも、今次、お目にかかることが出来ず、すると、馬も亦た其羣に別れたことを傷むが如く、悲しい聲を出して嘶いて居る。終日空は曇つて居たが、夕暮になつて、寒日はじめて照らし、風吹き渡る江水も、遠い處は、波も次第に穏かになりかけて来た。默然として、すべて語らざれども、君も亦た此時の我が思を推察して下さるであらう。

【餘論】朱竹垞は第六句を賞し、その評に「五六工、風江の字佳、もし江風ならば、常語のみ、且つ漸平は正に江を指して言ふ」とある。何義門は、又第三句に嫌らず「句澁直」といつて居る。

遊西林寺題蕭二兄郎中舊堂

西林寺に遊び、蕭二兄郎中の舊堂に題す

中郎有女能傳業、中郎、女の能く業を傳ふるあり、

【字解】(一)中郎有女、後漢書

律詩 次石頭驛寄江西王十中丞閣老 遊西林寺題蕭二兄郎中舊堂

伯道無兒可保家。伯道、兒の家を保つべきなし。

偶到匡山曾住處。偶また匡山曾住の處に到れば、

幾行衰淚落煙霞。幾行の衰淚、煙霞に落つ。

列女傳に「蔡邕の女、名は琰、字は文姬。興平中、天下喪亂、胡騎に擄らる。曹操、邕の嗣なきを痛み、金甌を以て之を贖ひ、重れて重祀に嫁せしむ。因つて問うて曰く、聞く、夫人

の家、先に墳墓多しと、豈に能く憶懐するや否や。文姬曰く、むかし、亡父、書四千許巻を題ふ、流離塗炭、存するものあるなし、今歸懐するところ、わづかに四十餘篇と。ここに于て、繕書して之を送る、文に遺蹟なし」とある。【三】伯道無兒。晉書鄧攸傳に「攸、字は伯道、河東太守たり。永嘉の末、石勒に没す。攸、その兒及び其弟の子姪を擔うて逃る。兩つながら全うする能はざるを度り、乃ち曰く、吾が弟、早く亡ふ、唯だ一息あるのみ、理、絶止すべからず、應に自ら我が兒を棄つべきのみ。幸にして存するを得ば、我、後、當に子あるべしと。乃ち其子を棄つ。江東に至り、向書左側射に至つて卒す。卒に以て嗣なし。時人、これが語を爲して曰く、天道無知、鄧伯道をして兒なからしむ」とある。【四】匡山。即ち廬山、廬山記に「匡俗は周の成王の時に出づ、生まれて神靈、隱居廬山、この山に廬す、故に、山、號を取る」とある。【五】煙霞。山中の景色をいふ。

【題義】西林寺は即ち廬山寺で、その山傍に、故の郎中蕭存の舊居の址があつたから、これを弔うて作つたのである。題下の自注に「蕭見、女あり、出家す」とある。唐書に「蕭存、字は伯誠、建中の初、殿中侍御史に遷り、四たび比部郎中に遷り、表延齡の姦を疾みて官を去り、風痺にて卒す。韓愈、少にして存に知らる、袁州より還るとき、廬山の故居を過存す。而して、諸子前に死し、唯だ一女在り、爲に其家を經紀す」とあり、因話錄には「蕭存は穎士の子、金部員外となり、檢校倉部郎中に終る。

三子を生む、皆早世、文公、少時、かつて金部の知賞を受く。袁州より入つて國子祭酒となるに及び、途、江州を經、因つて廬山に遊び、金部の山居を過ぎ、諸子の凋謝を訪知し、惟だ二女あるのみ。因つて、詩を賦して云云、百練を留めて以て之を捨ふ」とある。唐書には一女、因話錄には二女とあるが、孰れが正しいか分からぬ。それから、蕭存の父蕭穎士は、李華等と共に、古文家として知られた人で、蕭存も、亦た梁蕭と親善であつたと云へば、必ず其の家業を承けて、古文を善くしたのであらう。その外、韓會とも交が殊に親しかつたといふので、韓愈は、會の弟なる處から、早くより蕭存に知られ、その眷顧を受けたので、死後その遺族を賑恤したのも、如何さま、尤も至極の事である。それから、方崧卿は、官を棄てて廬山に歸る、廬山、今、猶ほ蕭存・魏宏・李渤、同じく大林に遊ぶの題名あり」と云つて居る。

【詩意】蕭君歿すること、すでに久しく、能く傳家の業を傳ふるに足る才女あるは、さながら、蔡中郎の様であるが、家を相續して行く男子なきは、恰も鄧伯道の如く、まことに、傷ましいことである。今、偶然、廬山なる君が舊居の址を尋ねると、物在つて人なく、ここに昔日知遇の恩を想ひ出でて、追慕自ら禁せず、われとても、老衰の身、幾行の涙が煙霞に降り注ぐのみである。

【餘論】この詩は、因話錄にも見えて居るが、いささか文字の異同があつて、左の如くである。

中郎有女能傳業。伯道無三人可主家。今日匡山過舊隱。空將衰淚對煙霞。

格別の事でも無いが、矢張、前に掲げた方が、文字が整うて居るので、もしかすると、因話録の方が初作で、これは、後から改竄したのかも知れない。前半、中郎・伯道、ともに其人に切、断じて移易すべからず、後半は悽惋無比。韓集中には、一寸他に比類なきものであるのに、後人、これを稱道するもの少きは、何の故か、いささか怪訝に堪へぬことである。

自袁州還京行次安陸先寄隨州周員外

袁州より京に還り、行いて安陸に次し、先づ隨州周員外に寄す

行行指漢東。暫喜笑言同。行行、漢東を指す、暫く喜ぶ笑言同じきを。

雨雪離江上。兼葭出夢中。雨雪、江上を離れ、兼葭、夢中を出づ。

面猶含瘴色。眼已見華風。面、猶ほ瘴色を含み、眼、已に華風を見る。

歲暮難相值。酣歌未可終。歲暮相値ひ難し、酣歌未だ終るべからず。

【字解】(一)漢東、左傳桓公六年に「漢東の國、國を大と爲す」とある。漢水の東。(二)笑言、言笑・笑語に同じ。(三)夢中、夢の中ではない、曾夢澤中の略。(四)瘴色、瘴は、前に數ば見えた通り、毒熱の氣。(五)華風、中原の華美な手ぶり。

【題義】蔣注に「唐本に自貶所蒙恩、袁州除官還京に作り、凡そ六字多し、亦た顛倒重複して曉

るべからず、疑ふらくは、袁州の字、當に貶の字の上在り、或は注して所の字の下に在るべし。一本に袁州の下、除官の二字あり、亦た通ず。隨、一に循に作る。經由の道里を以て之を考ふるに、是非ず。又復に作る。蓋し循の字に由つて誤る。他の説に非ざるなり」とある。すると、矢張、ここに掲げたのが、文義が一番順である。唐書地理志に「安州安陸郡は、中都督府、淮南道に屬す、隨州は漢東郡山南道に屬す」とある。後世は、兩處とも、湖廣德安府に屬して居た。方崧卿の説に據ると「周員外は周君巢なり、時に隨州刺史たり」とある。この首は、袁州より召されて、將に京に還らむとし、行いて安陸に宿りし時、豫め隨州刺史周君巢に寄せたのである。

【詩意】都に上る途すがら、行き行きて漢東を指し、お目にかかつて一緒に談笑することが出来るだらうと、その事を喜んであてにして居た。冬の最中、雨雪寒く降り注ぐ頃、江上の路を離れ、それから、兼葭の枯れ残れる中を通つて、やつと雲夢澤を出ぬけたから、これから先は、路は平で、旅も大分樂になる。南方より歸るのであるから、わが顔は、なほ瘴癘の色を含めども、眼前に中原の華美なる手ぶりを見るのは、まことに嬉しい。今しも、歲末に近き頃、君も定めて御多用で、ひよつと相逢ふことは出来ぬかも知れぬと思へば、今しも、酒酣なるに乗じて、自ら歌ひ出したが、せめてもの心遣りであるから、容易に止めもせず、やがて、この詩を作つて、君に呈する次第である。

【餘論】朱竹垞は「虚虚景を道ひ、情を言ひ、却つて雅味あり」といつて居る。しかし、この詩の起

結を見ると、すでに逢つたのだが、歳暮に際して再び逢ふことも出来ぬから、酣歌して十分に歡を盡さうといふ意味に取れる。但し、題に「安陸に次して、先づ寄す」とあるから、これから逢はうといふので、上の如く解釋したのであるが、何分にも、語字聊か足らず、爲に晦澁を來たした様な傾向あるは、稍や遺憾である。

題廣昌館

廣昌館に題す

白水龍飛已幾春。白水龍飛んで已に幾春、

偶逢遺跡問耕人。偶ま遺跡に逢うて耕人に問ふ。

丘墳發掘當官路。丘墳發掘して、官路に當る、

何處南陽有近親。何れの處か南陽に近親ある。

【字解】(一) 白水 文選東京賦

に我世祖之乃龍飛白水とあつて、薛綜の注に「世祖は光武を謂ふ、白水は南陽を謂ふ、白水縣は世祖起るところの處なり」とある。(二)

當官路 發掘した物を官道に投げ出してある。(三) 南陽有近親 後漢書劉隆傳に「時に天下墾田、多く實を以てせず、帝、陳留の東顧上書を見るに、云ふ、颍川安農は間ふべし、河南南陽は間ふべからずと。帝、吏に由を詰る。吏服せず。時に、顯宗、東海公たり、年十二、曰く、河南は帝城、近臣多し。南陽は、帝郷、近親多し。田宅、制に踰ゆるは、準と爲すべからずと。帝、吏を詰問す、吏、乃ち服すること、顯宗の對の如し」とある。つまり、南陽は、皇室の近親が多く居るといふので、吏も十分に之を檢問せず、田宅、その制に踰ゆるも、大抵見逃がして置いたといふこと。

【題義】 蔣注に「一統志に、廣昌館は棗陽縣北に在りと。按ずるに、棗陽は、唐、隨州に屬し、今、襄陽府に屬す。本と漢の南陽郡、蔡陽縣の地、江周廣昌郡を置く。隋、廢して、棗陽縣と改む。漢の世祖光武、實に此に産し、その故宅、尙ほ存す」とある。この詩は、廣昌館を過ぎ、漢代の遺跡の破滅せらるる現況を傷んで作つたのである。

【詩意】 後漢の光武帝が白水の地より龍飛し、炎運中興の大業を爲してから、幾年になるか、今しも、偶然その遺跡たる廣昌館を通りかかり、取り敢へず、畑を耕す農人を呼びかけて、色色問ひ試みた。ふと見れば、このあたりに在つた墳墓などは、近ごろ發掘されて、さまざまの物が官道に散らばつて居る。むかし、南陽には、皇室の近親が多く居るからといつて、特別の取扱を受けて居たといふが、千年後の今日、近親も何も有つたものではないので、この有様は、まことに慘澹たるものである。

【餘論】 蔣之翹は「これは、楚の昭王の廟に題すると、情事俱に感慨極まりなし」といひ、朱竹垞は「即ち張孟陽七哀の詩、しかも、四語を以て道ひ盡す。何等の明快」といつて居る。張孟陽は即ち晉の張載で、七哀の詩は、左の通りである。

秋風吐商氣。蕭瑟掃前林。陽鳥收和響。寒蟬無餘音。白露中夜結。木落柯條森。朱光馳北陸。淳景忽西沈。願望無所見。唯視松柏陰。肅肅高桐枝。翩翩棲孤禽。仰聽離鴻鳴。俯聽蜻蛉吟。

哀人易感傷。觸物增悲心。邱隴日已遠。纏綿思彌深。憂來令髮白。誰云愁可任。裴徊向長風。淚下沾衣襟。

寄隨州周員外

隨州周員外に寄す

陸孟丘楊久作塵。陸孟丘楊、久しく塵と作る、  
同時存者更誰人。同時に存するもの、更に誰人。  
金丹別後知傳得。金丹別後、知る傳へ得たるを、  
乞取刀圭救病身。刀圭を乞取して病身を救ふ。

【字解】 陸孟丘楊 方岳解

の解に「公、陸長源・孟叔度・丘穎楊  
凝及び周君巢と同じく、董晉の幕客  
たりしが故なり」とある。【三】 久  
作塵 死後して、すでに久しきない  
ふ。【三】 金丹 蔣注に「周、金丹

服餌の術を好む、柳子厚集中、周君巢に答へて餌藥久壽を論ずる書あり、是れなり」とある。なほ、この事は、餘論の項に於て附説することにしやう。【二】 刀圭 本草に「凡そ散藥には刀圭と云ふものあり、方寸の七を十分するの一準、梧桐子の大きの如きなり。方寸の七とは、七を作るに、正方一寸、抄散取つて落ちざるを度となす」とある。すると、刀圭は、散藥を調合する時、標準として用ふる七であつて、轉じて、調合方を云ふのである。

【題義】 隨州周員外は、前にも見えた隨州刺史周君巢。この詩は、途中から其人に寄せたので、どうやら、逢はずに仕舞つたものと見える。

【詩意】 お互に一緒に董晉の幕客として、毎に徴透して居た陸長源・孟叔度・邱穎・楊凝等の諸人は、

いづれも、久しい前に死んで、黃塵に化して仕舞ひ、今日生き残つて居るものは、外に誰があるか。君は、平生、金丹を服餌することを好まれるが、別後、定めて、その調合方を傳授して貰ひ、そして、病身を救つて、御達者で在らせられるものと見える。

【餘論】 朱竹垞の評に「起二句、道ひ得て率直、無限の感慨」とあるが、韓愈の本旨は、後半に在るので、即ち裏面から金丹を服餌することを嘲つたのである。柳宗元の答三周君巢書は、月日だけで、何年とも書いて無いから、よくは分からねぬが、その文中「宗元、罪の大なるを以て、擯廢せられて小州に在り」と書いてあるから、永州に居た時分、即ち元和元年より十年まで、永州に居る間に作つたもので、無論、韓愈の此詩よりも先であつて、周君巢が早くより金丹を服餌して居たことが分かる。柳宗元は、佛教に對しては、多少の信仰を持つて居たが、道家の説を好まず、殊に仙術などは大嫌ひであつたから、その書中に於て、手きびしく周君巢を攻撃して居る。試に其後半を引抄すると「又曰く、藥を餌すれば、以て久壽たるべく、將に分つて以て與へられむとす。もとより、小子の得るを欲せざるところなり。かつて以へらく、君子の道、處るときは、外愚にして内益す智、外訥にして内益す辯、外柔にして内益す剛、出づるときは、外内一の若く、しかも、時に動いて、以てその宜しく當るを取る。而して、生人の性、以て安んずるを得、聖人の道、以て光るを得、これを獲て申すれば、耆老に至らずと雖も、その道、壽なり。今夫れ、山澤の隴、我に於て有するなし。世の亂を視るも、

理まるが若く、人の害を視るも、利の若く、道の悻を視るも、義の若し。我、毒にして生き、彼、天にして死す。もとより、能く其肺肝を動かすなし。味味として趨り、屯屯として居り、浩然として餘あるが若く、草を掘り、石を烹、以て其筋骨を私して、日に以て益す愚、他人を利するなくして、己獨り以て愉、かくの若き者は、愈よ千百年を滋すも、謂はゆる天なり、又何を以て高明の爲に圖らむや（中略）苟くも、先聖の道を守り、大中に由つて以て出す。萬、擯弁を受くと雖も、其内を更めず、大都、往時京城の西にして丈人を言ふものに類す。愚改むる能はず、亦た丈人往時執るところを固くし推し、之を大にして、方士に惑はされざらむことを欲す。仕、未だ達せずと雖も、生人の患を忘るるなくむば、聖人の道幸甚。其れ必ず陳ぶるあらむといふので、その言、稍や倨なれども、世俗の謬見を打破して、極めて痛快である。韓愈とても、矢張、同じ見解を持つて居たに相違ないが、ここでは、いささか抑捺する氣味で、金丹の效能を賞美したのである。

酒中留上襄陽李相公

酒中留めて襄陽の李相公に上る

濁水汗泥清路塵

濁水汗泥、清路の塵、

還曾同制掌絲綸

還た曾て制を同じくして絲綸を掌る。

【字解】(一) 濁水汗泥清路塵、

文選曹植の詩に君若三清路塵、委若三濁水泥とある。(二) 同制、同職

眼穿長訝雙魚斷、眼穿つて、長く訝る、雙魚の斷ゆるを、  
耳熱何辭數爵頻、耳熱して、何ぞ辭せむ、數爵の頻なるを。  
銀燭未銷臆送曙、銀燭未だ銷えずして、臆、曙を送り、  
金釵半醉座添春、金釵半ば酔うて、座に春を添ふ。  
知公不久歸釣軸、知る公が久しからずして釣軸に歸るを、  
應許閒官寄病身、應に閒官に病身を寄するを許さるべし。

に制語を賜はる、即ち任官される。  
【三】掌絲綸、絲綸は、前にも見えた通り、禮記の「王官絲の如く、その出づる、綸の如し」に本づいて、天子の詔敕を稱す。それを起草する役は中書舍人、韓愈は元和十一年正月に中書舍人となり、李逢吉も同官であつたが、その年四月、中書舍人から宰相に拜命した。【四】眼穿、物に

穿ち入るまでも目を据みて見つめる。【五】雙魚、文選の古詩に客從三遠方、來、遺我雙鯉魚、呼、重葢三鯉魚、中有三尺素書」とあるに本づく。【六】耳熱、漢書楊惲傳に「酒後耳熱し、天を仰ぎ、位を拊つて嗚嗚と呼ぶ」とある。【七】數爵、即ち盃。【八】金釵中醉、或は壁に作り、何義門の説に「第六句は、前有二隨耳、後有二隨香の意を用ふ、注に依つて壁に作るを是となす」とあつて、その方が文義が順であるから、今これに従ふことにする。前有二隨耳は、史記滑稽傳、淳于棼の條に見えて居るので「若し夫れ、州閭の會、男女雜坐、酒を行らして稽留し、六博投壺、相引いて曹を爲し、手を擡つて罰なく、目眈して禁ぜず、前に隨耳あり、後に稽留あり、棼、此を樂む、飲むこと八斗ばかりにして、醉ふこと二盃」とある。【九】釣軸、地軸に同じ、ここでは朝廷の中心たす宰相を指す。

【題義】李相公は、原注に「逢吉を謂ふなり」とある。逢吉は前にも見えたが、舊唐書の本傳には、「憲宗、逢吉の政事を罷め、出して劍南西川節度使となす。穆宗即位、襄州刺史山南東道節度使に移

る」とある。この詩は、韓愈が襄陽を通るとき、舊知の李逢吉が其地の刺史たるに依りて會飲し、酒間に賦して贈つたのである。

【詩意】われは濁水の汗泥の如く、君は清路の塵の如く、その出處進退は、丸で比較に成らぬが、かつて同じく拜命して中書省に居たこともあるので、舊知の間柄なればこそ、今夜ここに會飲して、逸興を恣にする次第である。わが南遷中、眼穿つまでも眺め入つて、書簡の來ぬことを訝かしく思つて居た位であるから、この鐘上、大分酔つて耳が熱したとて、決して、さされた盃を辭せず、飽くまで痛飲したいと思つて居る。兎角する内、銀燭未だ銷えざるに、窓は白んで曙色を送り、侍坐する女の金釵は、半ば堅ちむとして、滿座の春を添へ、つまり、心おきなく、愉快に飲んで居ると、夜の明けるを知らぬ位である。君は、いづれ遠からずして、朝廷に召し還され、再び相位に列することであらうから、その時は、わが病める身に相應した閒職を與へて貰ひたいので、何分御引立の程を今から頼んで置く。

【餘論】朱竹垞は「頷聯、鍛鍊工なりと雖も、却つて未だ渾化せず、頸聯、興趣自ら住なり」といつたが、銀燭金釵の一聯は、いかにも明靚新婉で、韓愈に於ては、稀に見るところである。許彦周は殊に第六句を賞し、「退之の此語及び酩酊馬上知爲誰、殊にその人と爲りに類せず。乃ち知る、梅花を賦するは、獨り宋廣平のみならざるを」といつて居る。しかし、前にも云へる通り、李逢吉は、徹底的

の小人で、韓愈とは肌合はぬ筈であるのに、かくまで親密にし、且つ將來の援助を囑望したる如き、たとひ南遷を赦されて歸る途中であるとはいへ、聊か怪訝に堪へぬことであつて、顧嗣立が「李、最も退之と合はず、この詩、乃ち是の若く敷治するは何ぞや」と云つたのも、尤も千萬である。

去歲自刑部侍郎以罪貶潮州刺史乘驛赴任。

其後家亦譴逐小女道死殯之厓峰驛旁山下。

蒙恩還朝過其墓留題驛梁。

去歲、刑部侍郎より罪を以て潮州刺史に貶せられ、驛に乗じて赴任す、其後家も亦た譴逐されて小女道に死し、之を厓峰驛旁の山下に殯す。恩を蒙つて朝に還らむとし、其墓を過りて驛梁に留題す

數條藤束木皮棺。數條の藤は束ぬ木皮の棺。  
草殯荒山白骨寒。荒山に草殯して白骨寒し。  
驚恐入心身已病。驚恐、心に入つて、身すでに病み、  
扶昇沿路衆知難。扶昇、路に沿うて、衆、難きを知る。

【字解】(一) 木皮棺 まさか木の皮ではあるまいが、皮つきの棺の材で造つた棺。(二) 草殯 假りに埋葬する。(三) 扶昇 輿籠に乗せて昇いで行く。(四) 衆三區 禮記に「延陵の季子、長子死して寡母の

繞墳不暇號三匝。墳を繞つて、號んで三匝するに暇あらず、  
 設祭惟聞飯一盤。祭を設けて、惟だ聞く飯一盤。  
 致汝無辜由我罪。汝の辜なきを致すは、我が罪に由る、  
 百年慙痛淚闌干。百年慙痛淚闌干。

間に舞る、すでに對じて左袒し、右に其封を還し、且つ號ぶもの三たびとある。【一】飯一盤、爾雅疏時記、介子推を祭る文に乗飯一盤とある。【二】無辜、罪なくして死す。【三】淚闌干、社甫の詩に相視淚闌干とある。

【題義】この題の意味は——去歲、即ち元和十四年正月、予は佛骨の事を論せしに因り、刑部侍郎から、罪を以て潮州刺史に左遷せられ、ひとり、宿つぎの馬に乗つて赴任した。その後、家族どもも、都に留まつて居てはならぬといふことで、追ひ立てられ、相繼いで程に上つたが、小女一人、途中で病死し、層峰驛の傍なる山の下に假埋葬をして置いた。然るに、今次天恩を蒙つて、長安に召し還され、その墓の在るところを通つたから、この詩を驛亭の梁上に題した——といふのである。なほ、この小女に就いては、韓集中に女孿孿銘といふ一文があつて、その後、河陽なる先塋に歸葬したとある。その文には「女孿は、韓愈退之の第四女なり。惠にして早く死す。愈の少秋官たるや、佛は夷鬼、その法治を亂るを言ふ。天子、その言を不祥なりといひ、これを潮州、漢の南海揭陽の地に斥く。愈、すでに行く、有司、罪人の家、京師に留まるべからざるを以て、追つて之を遣る。女孿年十二、病んで

席に在り、既に驚痛して、その父と訣れ、又輿致して道を走り、據頓して食飲の節を失ひ、商南の層峰驛に死す、即ち道南の山下に瘞む。五年にして、愈京兆となり、はじめて、子弟と其姆とをして、棺を易へて女孿の骨を河南の河陽韓氏の墓に歸して、これを葬らしむ。女孿の死、元和十四年二月二日に當る。その發して歸るは、長慶三年十月の四日に在り、その葬は十一月の十一日に在り」と記してある。層峰驛は、商南といふから、商山の少し先で、武關の西、長安からは、わづか數日の行程である。何にしろ、病氣の處を雪後の寒天に擔ぎ出されたから、直に重態に成つて、また花の蒼の身が、あへなく路傍の雪と共に消えたので、まことに傷心の極である。韓愈は、長安を去る時に、訣別したのが最後となつたものと見える。されば、今次、はじめて、その墓をも祭つた譯で、恨恨の極、自然に此詩を爲したのである。

【詩意】汝の死せし時は、旅中の事として、跡始末も満足には出來ず、皮つきの儘の材で棺を造り、數條の藤蔓で之を縛つて、商山の麓に假埋葬をしたと云ふが、棺中の白骨は、定めて、その寒さに堪へぬことであつたらう。その初、われに別れる時、驚恐の念、心に入つて、身の病、愈よ重くなつたのに、無理に駕籠に乗せ、これを昇がせて道中を走らせたので、その六つかしいことは、誰でも知つて居た位。その時、自分は、先つて急行して居たから、葬事にも會せず、無論、墓を繞つて號哭しつゝ三匝することも出來ず、祭をするにも、一盤の飯だけを供へただけで、まことに情ない様な次第であ



つたといふことを聞いて居る。本来、辜なき汝をして、かくの如き慘澹たる最期を爲さしめたのは、汝の父たる予が大罪を犯したからで、慙痛の思は、終生消えもやらず、今、ここに來て、涙は闌干として絶えず流れる。

【餘論】もとより真情真詩で、巧拙を論すべきものではなく、朱竹垞は「用事親切、味あり」といつて居る。但し、第五句の佳なるに反して「下句切ならず、且つ何の爲に惟聞の二字を用ひしかを知らず」といひ、この二字の甚だ泛に失することを攻撃して居る。

賀張十八秘書得裴司空馬

張十八秘書の裴司空の馬を得るを賀す

司空遠寄養初成、司空遠く寄せて、養うて初めて成る、  
毛色桃花眼鏡明、毛色は桃花、眼は鏡のごとく明かなり。  
落日已曾交轡語、落日、すでに曾て轡を交へて語る、  
春風還擬竝鞍行、春風還た擬す、鞍を竝べて行かむと。  
長令奴僕知饑渴、長く奴僕をして饑渴を知らしむ、  
須著賢良待性情、須らく賢良をもて性情を待たしむべし。

【字解】(一) 司空 舊唐書裴度傳に「穆宗即位、位を檢校司空に進め、兼れて押北山諸蕃使に充てらる」とある。(二) 遠寄 遠方から懸懸願つて寄贈した。(三) 毛色桃花 爾雅に「馬の黃白雜毛を駉といふ」とあつて、郭璞の注に「今の桃花馬」とある。(四) 眼鏡明 眼は鏡の如く明かである。文選緒白馬賦に「雙瞳表」

旦夕公歸伸拜謝、旦夕、公、歸つて拜謝を伸ぶれば、  
免勞騎去逐雙旌、騎し去り雙旌を逐ふを勞するを免れむ。

旌とある。(五) 交轡 手綱を交へる。(六) 旦夕 いづれ其内。(七) 公歸 裴司空が任地から都に歸る。

【題義】張十八秘書は即ち張籍、舊唐書の本傳に「籍、太常寺太祝より國子助教秘書郎に轉ず」とある。はじめ、裴度が北地に赴任して良馬を得たから、はるばる都に上せて、張籍に贈ると、籍は、謝表司馬寄馬の七律を賦した。

驂耳新駒駿得名、司空遠自寄書生。乍離華廐移蹄澁。初到貧家舉眼驚。每被閒人來借問。多尋古寺獨騎行。長思歲旦沙堤上。得從鳴珂傍火城。

満城馳逐皆求馬。古寺閒行獨與君。代步本慙非逸足。緣情何幸枉高文。若逢佳麗從將換。莫共鶯駘角出羣。飛控著鞭能顧我。當時王粲亦從軍。

韓愈は、二人の唱和を讀んで、興を催し、仍つて、これを賦して、張籍に贈つたのである。

【詩意】裴司空から、はるばる馬を贈られたさうで、それを飼養し、この頃は、大分よく成つて來た。毛の色は、鮮麗なること、桃花の如く、兩目は、晃晃として、明かなること鏡のやうである。夕日

の西に斜なる頃、予は、嘗て手綱を竝べて君と語りつつ、乗り廻はしたこともあるが、やがて、春風  
 緩く吹く頃にもならば、鞍を竝べて、どこぞへ遠乗りでも致して見やう。もとより名馬の事であるか  
 ら、毎毎飢渴を奴僕に知らしめることも出来るので、矢張、賢良なるものとして、その性情を見、そ  
 して、厚く之を待遇せねばならぬ。裴公は、今、外に居られるが、いづれ遠からず歸京されるだらう  
 から、その馬に乗りつつ、雙旌を追ひかけて、態態、御禮を言ひに出かける必要もないことと思ふ。  
 【餘論】朱竹垞は「三四興趣佳、最も友人の馬を賀するの意を得たり」といつて居る。次に何義門は  
 「賢者志を得ずして、戎に従ふに至る、時知るべし。元勳大老、亦た以て久しく外に棄つべからざ  
 るなり。一馬の微に因つて、否の泰に還るに惓惓たり。公の意、ここに於て遠し」といひ、この詩の  
 結末、裴公の歸京、一日も早からむことを望む意は、もとより明白であるが、かくまで、深い意味に  
 取らずとも善からうと思ふ。

杏園送張徹侍御歸使

杏園、張徹侍御の使に歸るを送る

東風花樹下。送爾出京城。

東風花樹の下、爾が京城を出づるを送る。

久抱傷春意。新添惜別情。

久しく春を傷むの意を抱き、新に別を惜むの情を添ふ。

歸來身已病。相見眼還明。

歸り來つて、身、すでに病み、相見て、眼、還た明かなり。

更遣將詩酒。誰家逐後生。

更に詩酒を將て、誰が家にか後生を逐はしめむ。

【字解】(一) 花樹 無論杏花であらう。

【題義】杏園は、前に杏花の七古の中で、曲江滿園不可到の句の下に注して置いたが、康駢の劇談  
 錄に「曲江は、開元中、疏鑿して、勝境となす、その西に杏園・慈恩寺あり、花卉環周、煙水明媚  
 とあつて、慈恩寺附近の花園である。この題に就いて、方崧卿は「徹、時に幽州判官を以て朝に趨ら  
 ひとし、半道にして、詔あつて之を還し、仍つて、侍御史に遷る。張宏靖の請に従ふなり。その實、  
 徹、すでに京に抵り、但だ未だ朝見せざりしのみ。舊傳に云ふ、續いて、張徹、遠使より歸ると、是れな  
 り」といつて居る。すると、張徹が今次侍御史となり、引きかへして、すぐに幽州に赴くを杏園に送り、  
 その席上賦して示したのである。歸使の使は遠使で、即ち幽州節度使の處へ歸るといふ意味であらう。  
 【詩意】東風徐に吹き度る杏花の下に祖道の席を設けて、君が長安を出で、引きかへして幽州に赴く  
 のを送るのである。予は、頃ろ春の名残を惜むの意を抱いて居たのに、ここに又惜別の情を添へたか  
 ら、愈よ以て堪へられない。君は、今次、一寸都に歸つて來られたが、身、すでに病み、むかしの俤  
 も無いやうである。しかし、ここに相見ると、流石に嬉しく、われも亦た目がはつきりした様な心持

がした。この儘別れるのは、いかにも残念であつて、どこかの家から後進の子弟を狩り出し、詩酒一  
夕、大に驪を爲し、とても事に、君の行を壯にしたいと思ふ。

【餘論】朱竹垞の評に「亦た是れ慮虚意を道ふ。第六句、最も醒快、通首の精神を振起す」とあつて、  
この句が一篇の警策でもあり、且つ中心となつて居るのである。

雨中寄張博士籍侯主簿喜

放朝還不報、半路蹋泥歸。放朝、還つて報せず、半路、泥を踏んで歸る。

雨慣曾無節、雷頻自失威。雨慣れて、曾て節なく、雷頻りにして、自ら威を失ふ。

見牆生菌遍、憂麥作蛾飛。牆に菌を生ずる遍きを見、麥の蛾と作つて飛ぶを憂ふ。

歲晚偏蕭索、誰當救晉饑。歲晚偏に蕭索、誰か當に晉の饑を救ふべき。

【字解】「一」放朝、朝廷の職務を止めて休にする。「二」半路、一に夜半に作る。今、按ずるに、朝より  
歸つて夜半に至るに因なし。半路と作すも、亦た通すべからず。疑ふらくは、雨を以て放朝し、しかも、有司聞報に失し、行いて、  
半路に至り、乃ち報を得て歸るならむ。張籍の公に關する詩に云ふ、最濕惟添漏、泥深未放朝」とある。すると、雨の爲に、今  
日は朝饑が休みに成つたけれども、その報知が到達せられし故に、例の如く出勤し、途中で其事を聞き、雨中の泥を踏んで家に歸つ

たといふことである。「三」無節、節制なく失節に降りつづける。「四」夢作蛾、述異記に「晉の太康中、夢、化して飛蛾となる」  
とある。「五」救晉饑、左傳僖公十三年の條に「冬、晉荐飢に饑、饑を秦に乞はしむ」とある。

【題義】張籍・侯喜二人は、前に數ば見えて居た。この詩は、雨中無聊なる儘、賦して二人に寄せた  
ので、韓愈が國子博士たりし時、即ち元和十五年、秋冬の間の作である。

【詩意】今日は雨天で、朝儀も無いとの事であつたのに、報知が到着せざりし故に、例の如く出勤し、  
その途中で、これを聞き、雨中の泥のぬかるみを踏んで、とぼとぼと我が家に歸つて來た。この頃は、  
雨が降り通して慣れツ子に成つて仕舞ひ、その間、絶えて節制なく、雷も續けて鳴るものだから、威  
を失つて、あまり、こはくも無いやうに成つた。しかし、雨の多い爲に、牆の根本には、名も知らぬ菌  
が矢鱈に生えるが、それは先づ善いとして、この分では、麥が蛾に化して飛び、碌に收穫が無いかも  
知れぬので、聊か憂慮に堪へぬ。今しも、歲末に際して、かかる物さびしく不景氣な天候であるから、  
やがて、四民饑に苦むべく、古しへの晉國に比すべき此厄を誰か救ふであらうか。差し向き、さうい  
ふ人も見當らないので、唯だ饑饉など無い様にと祈るばかりである。

【餘論】朱竹垞は、前聯を賞して「雨雷は常事、しかも語を下すこと新、慣の字、人亦た用ふる罕な  
り」といひ、何義門は後聯を評して「句法別なり」といつた。次に、これに和した張籍の詩は、酬韓  
祭酒中見寄と題して、即ち左の通りである。

雨中愁不出。陰黑盡連宵。屋溼唯添漏。泥深未放朝。無鴛憐馬瘦。少食信兒嬌。問道韓夫子。還同此寂寥。

奉和兵部張侍郎酬鄆州馬尚書祗召途中見

寄開緘之日馬帥已再領鄆州之作

兵部張侍郎が鄆州馬尚書の祗召途中に寄せられしに酬い、緘を開くの日、馬帥已に再び鄆州を領するの作に和し奉る

來朝當路日承詔改轅時。來朝して路に當るの日、詔を承けて轅を改むるの時。

再領須句國仍遷少昊司。再び領す須句の國、仍つて遷す少昊の司。

暖風抽宿麥清雨卷歸旗。暖風、宿麥に抽き、清雨、歸旗を卷く。

賴寄新珠玉長吟慰我思。賴に新珠玉を寄す、長吟、我が思を慰む。

【字解】(一) 來朝當路 馬總が召されて上京せむとし、その途中に在ることをいふ。(二) 承詔改轅 詔を承け、再び鄆州に歸任せしをいふ。(三) 須句國 左傳僖公二十一年に「鄭人、須句を滅す」とあつて、杜預注に「須句は、鄆の東平須昌縣の西北に在り」といひ、蔣注には「今の山東樂平縣に須城あり」と記してある。(四) 少昊司 月令に「秋の三月、その帝は少昊」とあり、董

し秋は刑を主る。そして、馬總は、今次檢校刑部尚書を加へられしが故に云ふ。【五】宿麥 去年種きた麥。【六】賴寄新珠玉 賴は幸に、新珠玉は張買の新作の詩。

【題義】 原注に「張は張買を謂ふ」とある。兵部尚書たることは、ここに見えて居るが、その閱歴は詳でない。馬尚書は馬總、前にも見えて居たし、舊唐書の本傳に「元和十四年、檢校刑部尚書鄆州刺史天平軍節度使鄆曹濮等州觀察等使に遷り、就いて、檢校尚書左僕射を加へらる」とある。この詩は、いづれ、韓愈が袁州から長安に召し還された後、即ち長慶元年の作である。馬總が今次救命に依つて長安に召されたに就いて、その途に上り、途中から兵部侍郎張買に詩を寄せたから、張買は直に之を酬いて詩を贈つた。すると、馬總は、著京せぬ内に、詔に依つて再び鄆州に歸任することになり、張買から寄越した手紙の封を開く日に、愈々踵を廻らして發程した。その事を韓愈が聞き傳へて、張買に和して、この詩を作つたのである。

【詩意】 馬尚書は、折角、長安に來朝せむとして、その途中に在つた處が、俄に詔を承け、轅を回して再び歸任することに成り、都には上らずに仕舞つた。かくて、馬尚書は、古しへの須句國たる鄆州に歸向し、さきに官を遷して、少昊の官司たる刑部尚書を加へられ、何にしても、勢威赫赫として、素張らしいことである。今しも春の半、暖き東風は、去年種きた麥の苗を抽いて長せしめ、すがすがしき春の雨は、行列の先頭に建てた旗を卷き、旅路も長閑で面白くあらう。馬尚書が來京せずし

て歸任せられ、その爲に、拜晤を得ざるは、まことに遺憾なれども、張侍郎の贈られた名作があるから、これを吟じて、わが相思の情を慰めるのは、せめてもの心遣りである。

【餘論】石林詩話に「蔡天啓言ふ、かつて、張文潛と韓柳五字の警句を論ず、文潛、退之の暖風抽宿麥、清雨卷歸旗、子厚の壁空殘月曙、門掩候蟲秋を擧ぐ。皆集中第一」とある。朱竹垞は、これを承けて「この聯、文潛以て第一となす、豈に天然の成句、鍊の淨にして、その跡を混ぼすを謂ふか」といつた。なほ前聯に就いて、何義門は「魯の地は、少皞の墟たり、すでに秋官に切、仍は鄆帥に雙関す」といひ、亦た以て、その匠心の細を見るべきである。

### 早春與張十八博士籍遊楊尙書林亭寄弟三

#### 閣老兼呈白馮二閣老

早春張十八博士籍と楊尙書の林亭に遊び、弟三閣老に寄せ、兼ねて白馮二閣老に呈す

牆下春渠入禁溝。牆下の春渠、禁溝に入る。  
渠水初破滿渠浮。渠水、初めて破れて、渠に滿ちて浮ぶ。

【字解】「春渠」渠は溝水。

「禁溝」皇居の周圍なる溝。

鳳池近日長先暖。鳳池、日に近く、長く先づ暖かなり、

流到池時更不流。流れて池に到る時、更に流れず。

多く君寵を承けしが故に、その位を榮として、鳳凰池といつたので、何も、さういふ名の池が有るのではない。晉の荀勗が中書監より尙書令に轉ぜし時も「我が鳳凰池を奪ふ」といつた。

【題義】蔣注に「白馮は、白居易・馮宿を謂ふなり、弟三閣老は、楊於陵の子嗣復なり、乃ち嗣復の家の林亭なり、故に特に詩を以て之に寄せ、而して、併せて白馮に呈するなり。閣老の字、楊綰傳を按ずるに、故事、中書舍人、年久しきものを閣老となすと云ふ」とある。又同注に「弟三、一に之を弟に作る、然れども、王沂公の言行録に記す、楊大年、沂公を呼んで弟四應舍人と爲す、疑ふらくは、前世の遺俗、自ら此等の稱呼ならむ。弟三に作るを是となす」とある。それから、舊唐書には、各本傳あつて、楊嗣復には「字は繼之僕射於陵の子なり、進士の第に擢んでられ、長慶元年十月、庫部郎中知制誥を以て、正に中書舍人に拜す」とあり、馮宿には「東陽の人、元和十二年、表度に従つて東征し、彰義軍判官となり、淮西平らぐや、比部郎中に拜し、長慶二年、中書舍人に拜せらる」とあり、白居易には「字は樂天、太原の人、文辭富贍、尤も詩律に精し。長慶元年十月、中書舍人に轉す」とある。この詩は、長慶二年正月、韓愈が兵部侍郎に在職し、王廷湊の軍に使用する少し前、張籍と共に、尙書楊於陵の別邸に遊び、其子中書舍人嗣復に寄せ、且つ其同役たる白居易・馮宿の二人に呈

したのである。

【詩意】楊尙書の別邸なる牆下の溝水は、流れて宮城の濠に入るが、今しも春の初、渠中の氷は、暖氣の爲に盡く碎けて、渠中に一ぱい浮んで居る。中書省は、鳳凰池の稱があつて、もし實際池があつたならば、この頃、真先に水が暖くなつて居るに相違なく、この渠水が、やがて其池に注ぎ込めば、そこに滂蓄して最早流れぬであらう。

【餘論】全篇が賦の體で、前半は實況、後半は楊嗣復・白居易・馮宿の三人、同時に中書舍人に官し、まことに適任であるから、その儘、いつまでも留まつて居て貰ひたいといふ意を述べたものと考へられる。この詩は、平淺にして他の奇なきも、その時と處とより見れば、多少の巧警を推すべきものである。これに對しては、白居易の和作があるので、和韓侍郎題楊舍人林池見寄と題し、即ち左の如くである。

渠水暗流春凍解。風吹日炙不成凝。鳳池冷暖君諳在。二月因何更有氷。

詩意は、今しも、氷は解けて渠水は再び凍ることもない、君も、かつて中書舍人に官したことがあつて、鳳池の冷暖は知つて居られるが、二月の初、氷などあらう筈なく、まことに結構な處であるから、自分も刻下満足して居るといふので、即ち應酬の體を爲して居る。韓愈が中書舍人に官したのは、元和十一年正月で、考功郎中知制誥より榮轉したが、その五月には、太子右庶子に降され、明年、即ち十二年には、御史中丞を兼ね、行軍司馬として、淮西征討に従軍することに成つた。

ち十二年には、御史中丞を兼ね、行軍司馬として、淮西征討に従軍することに成つた。

奉使常山早次太原呈副使吳郎中

使を常山に奉じて、早に太原に次し、副使吳郎中に呈す

朗朗聞街鼓。晨起似朝時。朗朗として街鼓を聞く、晨起、朝時に似たり。

翻翻走驛馬。春盡是歸期。翻翻として驛馬を走らす、春盡、是れ歸期。

地失嘉禾處。風存蟋蟀辭。地は嘉禾の處を失ひ、風は蟋蟀の辭を存す。

暮齒良多感。無事涕垂頤。暮齒、良に感多し、無事にして涕頤に垂る。

【字解】(一) 朝時、入朝の時。(二) 嘉禾處、書の序に「唐叔、禾を得たり、故を異にして穎を同じうす、これを天子に獻す。王、唐叔に命じ、周公に東作に歸り、禾を歸る。周公、すでに命禾を得、天子の命を放み、嘉禾を作る」とあり、漢書地理志に「太原は晉陽縣、故の詩の唐國、晉水の出づる、東して汾に入る」とある。(三) 風存、風は國風。(四) 蟋蟀辭、詩の毛傳に「蟋蟀は、晉の僖公を刺るなり。これ晉なり、而して、これを唐と謂ふ、その風俗、憂深く、思遠く、儉にして禮を用ひ、乃ち堯の遺風あるに本づく」とある。(五) 暮齒、暮年、晩年に同じ。

【題義】舊唐書穆宗紀に「長慶元年七月、鎮州軍亂る、節度使田宏正、害に遇ひ、衙將王廷湊を推

律詩 奉使常山早次太原呈副使吳郎中

して留後となす。二年二月、詔して、王廷湊に雪ぎ、仍つて兵部侍郎韓愈をして、彼に往いて宣諭せしむ」とある。その事は、前に總説の中に述べて置いたから、ここでは省略する。この時、駕部郎中吳丹といふものが、副使となつて隨行した。唐書地理志に「鎮州は、常山郡、大都督府、本と恆州恆山郡、元和十五年、穆宗の諱を避けて名を更ふ、河北道に屬す」とあつて、後の北直隸眞定府。又同志に「太原府は太原郡、本と并州、開元十一年、府となし、河東道に屬す」とあり、蔣注には「春秋の晉陽の地、唐には北京といひ、今は府となして山西に屬す」とある。この詩は、韓愈が詔を奉じて鎮州常山の王廷湊を招撫しに出かけた時、太原に宿して早起し、仍つて、賦して同行の副使駕部郎中吳丹に示したのである。

【詩意】 朗朗たる街鼓の聲に夢を破られて、 曉早く起き出で、 さながら入朝の時に似て居る。しかし、これから翻翻として驛馬を走らせ、 遠く常山まで行かねばならぬので、その事が、うまく遣れた處が、歸るのは、いづれ春盡くる三月の末であらう。今しも、嘉禾を生じたといふ晉陽の地は、すでに失はれて、賊の有に歸し、國風として、唯だ蟋蟀の辭を存するのみ。何時、この土を回復して、天子の直轄地と爲すことが出来やうぞ。人も暮年になると、まことに多感になつて來て、無事の時に、涙は 頤に垂れる位、これから、張梁せる藩鎮に向ふに於ては、なほ更の事である。

【餘論】 前半は隔句對の形式に循ひ、前の送李員外院長分司東都と同格であつて、一に之を扇對と稱する。朱竹垞は之を賞して「亦た流動、態あり」といつて居る。それから鎮州出使は、李逢吉の中傷に出たといふ説が普通行はれて居るので、これに就いて、蔣之翹は「かつて按ずるに、唐子西曰く、公孫洪、董仲舒を以て膠西に相たらしめ、梁冀、張綱を以て廣陵に守たらしめ、李逢吉、韓愈を以て鎮州に使せしめ、盧杞、顔魯公を以て李希烈に使せしむ。その意を用ふる、正に相類す。然れども、これを史に考ふるに、公、出でて鎮に使するは、二月に在り、而して、逢吉は、三月、はじめて召されて兵部尙書となり、六月、はじめて裴度に代つて相となる。子西、爾か云ふは何ぞや、抑も豈に逢吉の險邪、遂に公の此行を以て、その中つるところと爲すか、天下の惡皆歸すとは、此謂なり」といつて居る。

夕次壽陽驛題吳郎中詩後 夕に壽陽驛に次し、吳郎中の詩後に題す

風光欲動別長安。 風光動かむと欲して長安に別る、  
 春半邊城特地寒。 春半、邊城、特地に寒し。  
 不見園花兼巷柳。 園花と巷柳とを見ず、  
 馬頭惟有月團圓。 馬頭惟だ月の團圓たるのみあり。

【字解】 一、風光欲動、春景色の立ち初むるをいふ。二、特地、地は助語、唯だ特にといふに同じ。

【題義】吳郎中は隨行の吳丹、その人の詩の後に題したといふが、原作は、傳はつて居らぬし、一本には、題を壽陽驛題三絶句としてあるとのことで、吳丹の詩とは格別の關係も無い様である。唐書地理志に「壽陽縣は、太原府太原郡に屬す」とある。この詩は、夜、壽陽驛に宿つた時に作つたので、無論、前首の次に在るべきものである。

【詩意】春も稍や景色だつ頃、長安を出立し、詔を奉じて、鎮州を招撫する爲に、だんだん北向したが、邊塞のあたりは、この二月の頃に際し、特に寒氣の甚しきを覺える位。園中の花、巷頭の柳ともに未だ之を見ず、夜に入つて急ぐ馬首の前には、團團たる月が高く照らすばかり、まことに、荒涼凄寂の有様である。

【餘論】この絶句は、一氣呵成、しかも風韻を失はず、韓集中に於ては、その類の少いものである。

鎮州初歸

鎮州初歸

別來楊柳街頭樹

別來、楊柳街頭の樹、

擺弄春風只欲飛

春風に擺弄して、只だ飛ばむと欲す。

還有小園桃李在

還有小園桃李の在るあり、

【字解】【一】楊柳街頭樹、街頭の楊柳樹といふので、鎮州に在るものを指す。【二】擺弄、ふるひ弄ばれる。【三】小園、自宅の庭園。

留花不發待郎歸

花を留めて發せず、郎の歸るを待つ。

【題義】この詩は、韓愈が王廷湊を叱して屈服せしめ、幸に帝命を辱めず、やがて目出たく歸京するに就いて、鎮州を出發する時に作つたのである。

【詩意】ここに鎮州を去るに就いて、街頭の楊柳に別れたが、その柳も、流石に心ありげに、春風にふるひ弄ばれて、わが方に靡いて飛ばうとして居る。汝の情思多きは、さることながら、わが自宅の園中には、桃李の樹があつて、春の儘で未だ花を開かず、わが歸るを待ち受けて、一齊に綻び出でむとして居るので、自然歸りも急がれ、心ならずも、汝を振り切つて急がねばならぬ。

【餘論】結句に待三郎歸の三字を著けた爲に、非常に多情の様に聞こえ、朱竹垞は「比擬殊に妙、風致筆端より溢れ出づ」といひ、つまり桃李を有情の佳人に比擬した處が、面白といふものと思はれる。然るに、桃李は、その侍妾を指したのだといふ説が、古くからあつて、唐語林に「退之の二侍妾、柳枝・絳桃と名づく。初め王廷湊に使するとき、壽陽驛に至り、絶句に云云」といつて、前詩を引き、つまり園花巷柳は、絳桃柳枝の變名だといひ、邵子聞見録も、亦た同じ様な軼事を傳へ「孫子陽、余が爲に言ふ、近時、壽陽驛、地を發して二詩石を得たり、唐人の跋に云ふ、退之に侍桃風柳の二妓あり、歸途、風柳すでに去りしを聞き、故に云云。後、張籍の祭退之の詩に云ふ、乃出三侍女」と。



この二人に非ざるか」といつて居る。しかし、蔣之翹は、之を辯駁し、退之は固より是れ偉人、歸來豈に別に念ふところなくして、獨り婢妾に殷殷たらむや。たとひ、之を思ふも、亦た懷人の常語を作すに過ぎざるのみ。更に何ぞ必ずしも名を切にし、意を致すこと、此の若くならむや。況んや、云ふところの地を發して詩石を得たるは、當時必ず韓公自ら立てしならむ、他人豈に去妾を以て言を爲さむや。これ韓公の意、蓋し故國の景色に感慨すること、詩の東山、有「敦瓜苦、蒸在粟薪、自我不見、于今三年」と旨を同じうす、その説、宜しく攻めずして破るべきなり」と云つて居る。

同水部張員外曲江春遊寄白二十二舍人

水部張員外と同じく曲江に春遊し、白二十二舍人に寄す

漠漠輕陰晚自開。漠漠たる輕陰、晚に自ら開く、

青天白日映樓臺。青天白日、樓臺に映す。

曲江水滿花千樹。曲江水滿つ花千樹、

有底忙時不肯來。底の忙しき時あつて肯て來らざる。

【字解】(一) 漠漠輕陰 花ぐも

りて天色漠漠たりしをいふ。(二)

花千樹 曲江は杏花を以て知られて居る。

【題義】舊唐書張籍傳に「累りに國子博士水部員外郎を授けられ、水部郎中に轉じて卒す。世、これ

を張水部といふ」とある。曲江は、前に杏花の五古にも見え、杏園の五律にも注して置いた。この詩は、張籍と共に春日曲江に遊びて杏花を賞し、仍つて、中書舍人の白居易に寄せたのである。

【詩意】一天漠漠たりし花ぐもりも、晚方になつて、はじめて晴れわたり、青天白日が樓臺に映じ、又一しほの眺めを増した。今しも、曲江の池水は、溶溶として滿ち、千樹の杏花は眞盛りで、最も游賞に宜しく、われ等二人、ここに興を縦にして居るのが、君は、どんな忙しい事があつて、ここに來られぬのか、まことに遺憾の至である。

【餘論】楊慎の評に「城中車馬應無數、能解閒行有幾人、亦た是れ此意」とある。それから、蔣注に「按ずるに、居易の和篇、白集に見ゆ。後世傳ふ、韓白往來の詩なしと、非なり」とある。その白居易の和作は、酬韓侍郎張博士雨後游曲江見寄と題し、左の如くである。

小園新種紅櫻樹。閒繞花行便當遊。何必更隨鞍馬隊。衝泥踏雨曲池頭。

詩意は、わが庭園には、近ごろ紅櫻樹を種ゑ、今が見ごろである處から、花下を繞つて歩行し、それで出游の代りにして居る。今日は雨後、鞍馬の後に従ひ、泥濘の路をこねて、曲江池へ出かけるのも億劫だから、つい無精をしましたといふのである。なほ白集を検すると、同韓侍郎遊鄭家池吟詩小飲と題して、

野艇容三人。晚池流浹浹。悠然依欄坐。水思如江海。宿雨洗沙塵。晴風蕩煙靄。殘陽上竹樹。

枝葉生光彩。我本偶然來。景物如相待。白鷗驚不起。綠茨行堪采。齒髮雖已衰。性靈未云改。逢詩遇杯酒。尙有心情在。

とあるが、これは、對應すべき韓愈の作が現存せざるに因つて、その詳は分からぬ。次に、和韓侍郎苦雨と題して、

酒氣凝柱礎。繁聲注瓦溝。開窗窓不曉。涼引簾先秋。葉溼蠶應病。泥稀燕亦愁。仍聞放朝夜。誤出到街頭。

といふのは、前の雨中寄張博士籍侯主簿喜の五律に和したものと思はれる。その證據には、彼此の作、ともに放朝の字が見えて居るからである。但し、韓愈のには歲晚偏蕭索とあつて、どうも多らしいが、白居易のには、涼引簾先秋とあつて、どうも秋冬の間ではなく、殊に後聯を見ると、春らしいから、これは、翌年の春になつて追和したものであらうか。それから、久不見韓侍郎、戲題四韻、以寄之と題して、

近來韓閣老。疏我我心知。戸大嫌甜酒。才高笑小詩。靜吟乘月夜。閒醉曠花時。還有愁同處。春風滿鬢絲。

といふのがある。韓の題、白の平易、韓の雄大、白の纖麗、全く其趣を異にして居るが、二人は、相當の交際があつたので、もとより、白、韓を喜ばず、韓、亦た白を喜ばなかつた譯ではない。唯だ

中年以後、二人同時に長安に居たことは、極めて少く、韓愈が兵部侍郎、白居易が中書舍人たりし時は、二人とも、粗ば得意の境涯に在つて、しかも、同じ都の内に居たから、かくの如く屢は唱和を試みたのである。古來の注釋者が、今少し詳しく白集を檢點したら、定めて獲るところがあつたらうと思ふが、予は、ここに聊か其闕を補つたに過ぎぬ。なほ二人の中間に立つたのは張籍で、雙方に親善なりしに因り、頻りに輪旋の勞を執つたものと思はれる。

和水部張員外宣政衛賜百官櫻桃詩

水部張員外の宣政衛に百官櫻桃を賜ふの詩に和す

漢家舊種明光殿。漢家、舊と明光殿に種う、

炎帝還書本草經。炎帝、還た本草經に書す。

豈似滿朝承雨露。豈に似むや、滿朝雨露を承くるに、

共看傳賜出青冥。共に看る、傳賜の青冥を出づるに。

香隨翠籠擎初到。香は翠籠に隨つて、擎げて初めて到り、

色映銀盤寫未停。色は銀盤に映じて、寫して未だ停まらず。

律詩 和水部張員外宣政衛賜百官櫻桃詩

【字解】一、漢家、漢の帝室。

二、明光殿、洛陽宮殿簿に「漢に明光殿、徽音殿あり」といひ、又、顯陽殿前櫻桃六株、徽音殿前、乾元殿前並に三株とある。

三、炎帝、神農氏、神農を以て草

木を撰ち、又百草を嘗めて、初めて

醫藥を創し、本草經は、その書と稱せられ、その中に「櫻桃は味甘く、

食罷自知無所報。食し罷んで自ら知る、報する所なきを、空然慙汗仰皇扇。空然慙汗、皇扇を仰ぐ。

皇扇、翠色の竹筒、それに櫻桃を盛つて賜はるのが例となつて居る。【六】銀盤寫未停、禮記に「器の盛ぐものは寫さす、その餘は寫す」とあつて、その注に「これを器中に傳ふるを謂ふ」とあり、又杜市の野人送朱橘の詩に數回寫寫恐仍破とある。寫とは、一の器から他の器に移し入れること。東觀漢記に「明帝、羣臣を大宮に宴し、櫻桃を進むるに、赤瑛盤を以てし、羣臣に賜ふ。月下に之を割れば、盤と櫻桃と、色を同じうす。羣臣、皆笑うて曰く空盤」とある。【七】皇扇、扇は月ぼそ、ここでは皇扇を指す。扇の都合で、扇の字を用ひたのである。

【題義】本草に「櫻桃樹は、甚だ高からず、春初、白花を開き、繁英雪の如く、葉圓にして、尖及び細齒あり、子を結ぶこと一枝數十顆、三月熟す」とあり、一名を鶯桃、又は含桃といひ、鶯鳥が好んで食ふとのことである。日本の今のさくらんぼうといふのが、普通であるか、どうか、ゆすらうめの様にも思はれる。それから、支那では、むかしから、ひどく之を珍重したので、爾雅翼に「果熟する、最も先、故に含桃を以て先づ薦む」とあり、禮記の月令にも「仲夏の月、天子羞むるに含桃を以てし、先づ寢廟に薦む」とあつて、それは、周代から起つたことである。漢の惠帝が離宮に出遊された時、叔孫通は「古しへ、春に嘗つて果を嘗むる事あり、今や櫻桃熟せり、願はくは、陛下、これを取らば、以て宗廟に獻せよ」といひ、帝は之を許された。周漢の時、すでに此の如く、唐になつても、

矢張、前例に従つたものと見え、李綽の歲時記に「四月一日、内園より櫻桃を寢廟に進む、薦め訖つて、百官に頒賜すること、各差あり」とある。されば、唐に在つては、獨り薦廟の典たるのみならず、同時に百官に班賜するを例とし、景龍文館記に「上、侍臣と樹下に櫻桃を摘み、その食を恣にし、末後、大に宴を陳して、宮樂を奏し、暝に至つて、人ごとに朱櫻兩籠を賜ふ」とある。この詩は、水部員外郎張籍が宣政殿の控所に於て、百官に櫻桃を賜はりしに因り、自分も頂戴し、仍つて、詩一首作つたから、韓愈が、それに和して作つたといふので、張籍の原作は、朝日敕賜百官櫻桃」と題して、即ち左の如く、ここに朝日といふは、參朝の日といふことである。

仙果人間都未<sub>レ</sub>有。今朝忽見下<sub>二</sub>天門<sub>一</sub>。捧盤小吏初宣<sub>レ</sub>敕。當殿羣臣共拜<sub>レ</sub>恩。日色遙分<sub>二</sub>門下座<sub>一</sub>。露香才出<sub>二</sub>禁中園<sub>一</sub>。每年重此先偏<sub>レ</sub>侍。願得<sub>二</sub>三千春<sub>一</sub>奉<sub>二</sub>至尊<sub>一</sub>。

【詩意】櫻桃の珍重されるのは、随分古いことで、漢の帝室では、これを明光殿の前に種る、その前、炎帝は本草經を著し、その中に、ちやんと書き込まれた。今や滿朝の臣僚が同じく雨露の御恵を承くるは、まことに譬へむやうなく、かくて賜を拜して宮中から退朝する。その櫻桃の實は、緑の竹籠に盛つてあつて、擎げて持ち出して来たときは、えならぬ匂がするし、やがて、これを銀盤に入れるときは、その色が相映じて、まことに見事で、なかなか移し切れない。さて之を食し罷んでから、熟ら思へば、さしもの天恩報ゆるに由なく、つくねんとして慙汗を流し、巍然たる宮闕をのみ仰いで居る

律詩 和水部張員外宣政殿賜百官櫻桃詩

のは、われながら、まことに附甲斐なきことである。

【餘論】 蔣之翘は「詞も亦た雅麗、張の作に較ぶれば、特に勝れり」といひ、又胡元任の言を引いて「退之が櫻桃を賜はりし詩、王摩詰と五六頗る相似たり、然れども、摩詰の詩は渾然として、退之に勝れり」といひ、後に顧嗣立も「彷彿として摩詰の作に效ふ」といつて居る。その王摩詰の作といふのは、敕賜百官櫻桃と題して、即ち左の如くである。

芙蓉閣下會千官。紫禁朱櫻出上蘭。纔是寢園春薦後。非關御苑鳥銜殘。歸鞍競帶青絲籠。中使頻傾赤玉盤。飽食不須愁內熱。大官還有蔗漿寒。

さすがは、盛唐の大家だけに、步趨堂堂として、又一段の見ばえがある。次に朱竹垞は「この詩、却つて中唐に落ちず」といひ、何義門は「穆宗昏荒、復た以て爲すあるべからず、公、朝に立つと雖も、徒に俯仰默歎するのみ。自知無所報といふは、正に報せむと欲して、路なきを傷むなり。公、崔立之に寄するの詩、無能食國惠、豈異哀癡罷、其れ即ち慙汗二字の注脚か」といつて居る。

早春呈水部張十八員外二首

天街小雨潤如酥。天街の小雨、潤うて酥の如し、

【字解】「二」天街 都大路。

草色遙看近却無。草色遙に看るも、近づけば却つて無し。

最是 一年春好處。最是れ一年春好きの處、

絶勝 煙柳滿皇都。絶えて勝る煙柳の皇都に滿つる。

【三】潤如酥 酥は牛酪、即ちバター、潤うて鹽齎して居ることが牛酪の味である。【二】最是 一年春好處 一年中で春景色の一番好い時。【三】

題外 縁に煙る柳。【三】 皇都 長安。

【題義】 説明に及ばぬ。この詩は、多分、長慶三年の正月に作つたのであらう。

【詩意】 都大路には、春の小雨がしとしと降り、あらゆる物は、潤うて鹽齎しく、さながら、牛酪の如くである。草は初めて芽ぐみ、遠くからは青く見えるが、近よると何も無い。今しも、一年中、春景色の一番好い時で、萬樹の柳が縁に煙つて、長安に滿つる時にも優つて居る。

【餘論】 第二句は、人人の言はむと欲するところで、逸早く拈出したのは、作者の手柄である。結局は、見方に依つては、寓意隱然、つまり、小人の跋扈に比した物と思はれる。朱竹垞は「景絶妙、寫し得て亦た絶妙」と云つて居る。

莫道官忙身老大。道ふ莫れ、官忙しく身老大、

即無年少逐春心。即ち年少春を逐ふの心なしと。

【字解】「一」老大 年が寄つた。【二】逐春 春景色を尋ね廻る。【三】如今 只今。

憑君先到江頭看。君に憑つて、先づ江頭に到つて看む、  
柳色如今深未深。柳色如今深きか、未だ深からざるかを。

【詩意】何も官職が忙はしく、おまけに、年も寄つて老いさらばひ、そこで、むかし少年の時の如く、どこまでも春を追ひ廻はす様な頓狂の心が無いといふ譯でもなく、幾分は、依然として、舊態を存して居る積り。そこで、君に御依頼するが、先づ江頭に到り、今しも、柳の緑は、すでに深く成つたか、未だしか、どうか、篇と見て来て知らせて呉れろ。もし柳が緑に成つた様ならば、この老夫も浮かれ出し、病餘の身を扶けて、ぼつぼつ歩いて見たいと思ふのである。

【餘論】春の深きを聞知して後、はじめて出游しやうといふのは、たとひ、春を逐ふの心は變せずとするも、身の老なることは、遂に免るることが出来ない。朱竹垞は「粗鹵中、却つて韻致あり」と云つて居る。

送桂州嚴大夫

桂州の嚴大夫を送る

蒼蒼森八桂。茲地在湘南。  
江作青羅帶。山如碧玉簪。

蒼蒼として八桂森たり、この地、湘南に在り。  
江は青羅帶を作し、山は碧玉簪の如し。

戶多輪翠羽。家自種黃甘。

戸多くは翠羽を輪し、家自ら黃甘を種う。

遠勝登仙去。飛鸞不假驂。

遠く勝る登仙し去り、飛鸞するに假あらざるに。

【字解】一、八桂。山海經に「桂林の八樹は、實偶の東に在り」と記して、郭璞の注に「樹、林を成す、その大なるを言ふなり、實偶は香香偶」とある。楚辭に嘉三南州之炎德、今歷三桂樹之冬榮」とあり、文選天台山賦に八桂森挺以凌霜とあるのも、ともに此樹である。二、湘南。湘水の南、蔣注に「湘水は、桂林の全州に在り、柳閉の記に、分水嶺は即ち湘羅二水、東、海陽より此に至り、北して湘水となり、南して羅水となる」とある。三、江作青羅帶。東坡の言に「退之の詩、江作青羅帶、子厚の詩、海上羣山似劍鉞、予、これが對を爲して曰く、翠羽、鸞の羽、禽經に「背に彩羽あるを鸞翠といふ」とあつて、その注に「狀は鸞の如くして、色は正碧、多臨、鸞羽とある。四、家自種黃甘。黃甘は橘の屬にして味精、嶺南及び江南に生ず」とある。五、不假驂。鮮野受すべし。沅波瀟湘の側に飲賦し、尤も其羽を惜み、日に水中に濯ふ。今、王公の家、以て婦人の首飾と爲す」とある。六、黃甘。甘は即ち柑、上林賦に黃甘橙櫟とあつて、その注に「黃甘は橘の屬にして味精、嶺南及び江南に生ず」とある。七、不假驂。何曉門の説に「假、或は暇に作る。按ずるに、暇の字佳。假の字、勝仙と相應せず」とある。

【題義】唐書地理志に「桂州、始安郡、中都督府」とあり、嚴大夫は、原注に「嚴謨なり」とあるが、その人の閱歴等は、さつぱり分からぬ。この詩は、嚴謨が桂州都督となつて赴任するのを送つたので、自注に「同じく、南字を用ふ」とあるを見れば、嚴謨と同じ韻を限つて作つたものと見える。

【詩意】君の今次赴任せられる桂州は、湘江の南に在つて、音に聞く八株の桂樹が森森として茂つて居る處である。湘江は其地を繞つて、青羅の帯を抱くが如く、四境の羣山は、翠色濃にして、碧玉

の簪を挿し鬢した様である。桂州は、南土の暖地であるから、戸ごとに翡翠の羽を上納し、又家ごとに黄柑を栽培して、その風土は、中国と大分違つて居る。君が其地に赴きし後は、かかる風物を留賞せられるので、仙人となつて、天上に登り、飛鸞に馳する暇もない程。自ら駈け廻るに比して、はるかに勝つて居ることであらう。

【餘論】朱竹垞は、「これ淺調、屬對却つて工、頗る初唐に類す」といつて、聊か肩聯を賞して居る。同時に張籍の作があつて、送嚴大夫之桂州と題して、その全首は左の如くである。

旌旆過湘潭。幽奇得偏探。莎城百越北。行路九疑南。有地多生桂。無時不養蠶。聽歌疑似曲。風俗自相諳。

矢張、南の字を韻として用ひて居るから、愈よ限韻の作たることが分かるし、その作法も、全く韓愈と同じである。

奉酬天平馬十二僕射暇日言懷見寄之作

天平馬十二僕射の暇日懷を言うて寄せらるるの作に酬い奉る

天平篇什外。政事亦無雙。天平篇什の外、政事亦た無雙。

威令加徐土。儒風被魯邦。

威令、徐土に加はり、儒風、魯邦に被る。

清爲公論重。寬得士心降。

清は公論の爲に重く、寬は士心を得て降る。

歲晏偏相憶。長謠坐北牕。

歲晏くして偏に相憶ふ、長謠、北牕に坐す。

【字解】(一) 篇什 詩賦に同じ。(二) 徐土 劉禹錫の天平軍節度使廬山記に「惟れ鄂、春秋に在つては須句の國たり。補を宣べて上に在り。晝は文宿たり。野を畫して下に在り、魯は魯邦たり。孤賈に、海岱及び淮までは惟れ徐州とあり、前漢、徐を以て臨淮に隸するときは、徐も亦た魯なり」とあり、又詩經の常武に書三徐土とあり、開宮に魯邦是常とある。(三) 長謠 文選劉毅の詩に引領長謠とある。

【題義】前に奉和兵部張侍郎酬鄆州馬尚書云云の詩にも見えたが、この馬僕射は即ち馬尚書、舊唐書の本傳に「元和十四年、馬總を以て鄆曹濮等州觀察使となし、十五年、その軍を名づけて天平軍となし、就いて、檢校尚書左僕射を加ふ」とあるから、どちらを呼んでも差支ないのである。この詩は、その馬總が暇日懷を抒べて詩を寄せられたるに因り、これに酬いむが爲に作つたのである。

【詩意】君は、今、天平軍を統轄し、詞章の外、本職の政事にかけても、天下無雙と稱せられ、その威令は、古しへの徐州に加はつて、誰も違背するものなく、儒風は魯邦に被及し、さながら、周公孔子の昔に復歸したやうである。その心操の清きことは、公論の重きを爲し、駕御の寬なることは、士心をして歸服せしめる。今しも、歳の將に暮れむとするに際して、偏に相思ふの情に堪へず、仍つて

北窓に坐して、聊か長話を爲したのである。

【餘論】朱竹垞は「兩語、賢者に非ざれば、能く當るなし、もとより是れ善頌」と云つた。つまり、兩聯は、馬總その人の功績と人物とを稱揚したのである。

奉使鎮州行次承天行營奉酬裴司空

使を鎮州に奉じ、行いて承天行營に次し、裴司空に酬い奉る

竄逐三年海上歸。竄逐三年、海上より歸り、

逢公復此著征衣。公に逢うて、復た此に征衣を著く。

旋吟佳句還鞭馬。旋ち佳句を吟じて、還た馬を鞭つ、

恨不身先去鳥飛。恨むらくは、身去鳥に先つて飛ばざるを。

【二】海上。袁州を指す。【三】旋。忽ちと同義で、意味がはるかに軽い。

【題義】この詩は、前に立ちもどつて、王廷湊を招撫すべき使命を奉じて鎮州に行く途中、承天の行營に宿りし時、東都に留守たる司空裴度から、詩を寄せられたから、それに酬いむが爲に作つたのである。

【字解】【一】竄逐三年。潮州に

左遷され、それから、袁州に量移さ

れしことを云ふ。元和十四年の春、

長安を出で、十五年の冬、還つたか

ら、滿二年であるが、ここでは、平

仄の都合で、三年といつたのであら

【詩意】佛骨の一表、ゆくりなくも罪を獲、南荒に竄逐されたこと、三年の久しきに及び、やがて、

袁州から歸京し、今次詔を奉じて出かけ、又貴方に御目にかかつて、此に征衣を著けて發程した。然

るに料らずも、寄懐の佳作を贈られた故に、これを高吟しつつ、激勵の意味に感動し、早く彼地に到

著したくて堪まらぬ處から、馬に鞭つて出かけたが、この身、去鳥に先つて、鎮州まで唯だ一刻に飛

んで行かれる術なきことが、まことに残念である。

【餘論】今次の鎮州行は、詔を奉じて、王廷湊を諭す爲であつて、裴度には、全然、關係が無いの

に、第二句に逢公復此著征衣といつたのは、まさしく尊題法である。新唐書に「愈の鎮州を宣撫

するや、衆、皆これを危む。元稹、穆宗に謂つて曰く、韓愈、惜むべしと。上、亦た悔い、詔令を馳せ、

事を度り、宜しきに從つて、必ずしも入ることなからしむ。愈曰く、安んぞ、君命を受け、しかも滯

留して自ら願るものあらむやと。遂に疾驅して入り、賊營に至り、その衆を麾いて之を責む。庭

湊、命を聽いて、牛元翼を出す」とあつて、後に東坡の作つた潮州韓文公廟碑に「勇は三軍の帥を奪

ふ」といふのは、即ち此事である。つまり、穆宗は、いたく後悔せられ、遲留して居てもかまはぬと

いはれたが、韓愈は、自ら急いで賊地に乗り込んだのであるし、裴度の寄詩も、亦た激勵の意味を述

べたものに相違ない。乾隆御批に「詔して遲留を許す、しかも奮迅、かくの如し、仁者の勇、庶

はくは愧づるなし」とあつて、ここらは、流石に韓愈の偉らい處である。

鎮州路上謹酬裴司空相公重見寄

鎮州路上、謹んで裴司空相公の重ねて寄せらるるに酬ゆ

銜命山東撫亂師、命を銜んで、山東に亂師を撫す、

日馳三百自嫌遲、日に三百を馳せて、自ら遅きを嫌ふ。

風霜滿面無人識、風霜滿面、人の識るなし、

何處如今更有詩、何の處にか、如今、更に詩ある。

しても五十里もあるのて、たとひ行き得るにしても、體分大急ぎの行程である。

【題義】この詩は、鎮州に赴く途上、裴度が重ねて東都から詩を寄せたから、それに酬いて作つたのである。

【詩意】われは、今次、敕命を受け、山東の鎮州に赴いて、藩鎮の騷擾を鎮撫しやうといふので、日ごとに馳すること三百里、出来るだけ急いで居るが、それでも、もどかしくて堪まらぬ位。北地春淺くして、寒なほ劇しく、風霜面に滿ち、忽ちの内に憔悴して、識別する人も無いと思ふ位。されば、今日どこへ往つたとて、この外に詩など有らう筈がない。つまり、刻下は、早く賊地に乗り込みたいといふ一心だけで、詩どころの騒ぎではない。

【字解】【一】銜命、敕命を受け。【二】山東、鎮州を指す。【三】三百、無論、三百里の時、太平の時。【四】擲落、ふるひ落す。語に類する語はあるが、外に同遠ふ氣遣ひは無いから、先づ裴支は無からう。三百里といへば、日本里數に

【餘論】究極の處は、前首と同じであるが、言ひ廻はしが異なつて居るから、竝存を妨げず、又汁粉を食つた跡でお萩といふやうな感じも起らずに済むのである。

奉和僕射裴相公感恩言志 僕射裴相公の恩に感じて志を言ふに和し奉る

文武成功後、居爲百辟師、文武功を成すの後、居ながら百辟の師となる。

林園窮勝事、鐘鼓樂清時、林園、勝事を窮め、鐘鼓、清時を樂む。

擲落遺高論、雕鏤出小詩、擲落して、高論を遺れ、雕鏤して、小詩を出す。

自然無不可、范蠡爾其誰、自然に不可なるなし、范蠡、爾、其れ誰ぞ。

【字解】【一】文武成功、裴度が内に在りては宰相として治を致し、外に在りては淮西の吳元濟を討平せしをいふ。【二】百辟、百官に同じ。【三】窮勝事、面白い遊を縱にする。【四】鐘鼓、音樂。【五】清時、清平の時、太平の世。【六】擲落、ふるひ落す。【七】雕鏤、彫刻、修辭の極めて精細なるをいふ。【八】范蠡、史記越王勾踐世家に「范蠡、越王に事へ、吳を滅して命稽の恥に報ゆ。以爲へらく、大名の下、以て久しく居り離しと。乃ち其輕賈を裝ひ、舟に乗じ、海に浮んで以て行き、終に反らず」とある。

【題義】この詩は、裴度が恩に感じて述懐した其詩に和したといふので、多分、長慶二年六月、右僕射に成つた時であらうと思ふ。但し、裴度の詩は、今存するもの、二十首に滿たず、この首も、傳

律詩 鎮州路上謹酬裴司空相公重見寄 奉和僕射裴相公感恩言志



はつて居ないのは、まことに遺憾の至である。

【詩意】 裴相公は、文武兩つながら功を成せし後、居ながらにして百官の師表となり、その聲望は、まことに素張らしいものである。しかし、優游として閑地に就き、林園に在りて、おもふ存分、愉快なる遊を縱にし、常に鐘鼓の樂を奏して居られる。そこで、世事を擺ひ落して、高尚なる議論を口にせず、折角、修辭の工夫を凝らして小詩を作られる。古しへから、大名の下には久しく居り難いと云ふが、裴相公の如くすれば、自然、不可なることはなく、かの范蠡などは、まるで話に成らぬものである。

【餘論】 朱竹垞は「二詩(後首を云ふ)能く大賢功成りし後の心事を道ひ出し、高からず、卑からず、世と推移す、而して主張自ら有り、細に玩べば、深く腴味あり」といひ、何義門は「次聯、是れ恩に感ず、故に味あり」といつて居る。なほ詩話總龜に「慶曆中、西師、未だ解けず、晏元獻、樞密使たり。大雪に會し、酒を西園に置く。歐陽永叔、詩を賦して云ふ、須憐鐵甲冷徹骨、四十餘萬屯邊兵と。晏曰く、むかし、韓愈、亦た能く言語を作す、裴度の會に赴く、但だ林園窮三勝事、鐘鼓樂三清時」と云ふのみ。かつて、此の如く圖を作さず」とあつて、乾隆御批に之を引いて「夫れ裴度の綠野に優游する、乃ち己むを得ずして、世と浮沈す。故に愈の詩云云、晏殊は、處るところ同じからず、永叔の飄風を聞けば、正に容を改めて之を謝すべし、顧るに、猶ほ中に怫然たるか」といつて、流石に

善く事理を盡して居る。

和僕射相公朝廻見寄

僕射相公の朝より廻つて寄せらるるに和す

盡瘁年將久。公今始暫閒。 盡瘁、年將に久しからむとす、公、今はじめて暫く閒なり。

事隨憂共減。詩興酒俱還。 事は憂に隨つて共に減じ、詩は酒と俱に還る。

放意機衡外。收身矢石間。 意を放つ機衡の外、身を收む矢石の間。

秋臺風日迴。正好看前山。 秋臺、風日迴かなり、正に前山を看るに好し。

【字解】 一、盡瘁、王事の爲に心力を盡して瘦せ衰へる。二、詩興酒俱還、詩酒の閑地に立ち歸つたといふこと。三、機衡、

【題義】 この詩は、裴度が參朝して歸宅し、その感懷を述べて寄せたから、それに和して作つたので、矢張、前詩と同じ頃である。そして、その原作は、亦た傳はつて居らぬ。

【詩意】 裴相公は、國家の爲に盡瘁すること、年、すでに久しからむとし、今しも、やつと、閑地に就かれた。かくて、世事は憂に隨つて共に減し、再び詩酒の風流に立ち歸られたのは、まことに、喜ぶ

律詩 和僕射相公朝廻見寄

べきこととて、ここに、心意を朝政の外に放ち、身を矢石の間より收められた。今しも秋、臺に登れば、風日朗かに晴れ、前面なる終南一帯の山が、くつきりと見えるのは、まことに、心地よきことである。

【餘論】庚溪詩話に「蘇子瞻、陶詩に和して云ふ、前山正好數、後騎且莫驅と。この語と同じからずと雖も、しかも情を物外に寄す、夷曠優游の意は、すなはち一」とある。次に、乾隆御批は、これと前首と合せ評して「退之、中立（表度の字）と雅契、同じく艱危を涉り、功業を樹つ、その當時、朝局元老の苦心に於ける、これを知る最も深きものあり、二詩能く之を曲傳す、諷詠殊に餘味あり」と云つて居る。

奉和李相公題蕭家林亭 李相公の蕭家林亭に題し和し奉る

山公自是林園主 山公自ら是れ林園の主

歎惜前賢造作時 歎惜す前賢造作の時

巖洞幽深門盡鎖 巖洞幽深、門、盡く鎖つ

不因丞相幾人知 丞相に因らずば、幾人か知らむ

り、歌うて曰く、山公出三何許、往至高陽池、日夕倒載歸、醉時無所知」とある。【三】前賢、蕭氏の前代の人人をいふ。【三】遺

【字解】【二】山公、即ち山簡、

晉書の本傳に「襄陽に鎮するるとき、諸習氏は荆土の豪族、佳園池あり、簡出でて遊嬉する毎に、多く池上に之を、酒を置いて輒ち醉ふ、これを名づけて高陽池といふ。時に兒童あり、蕭氏の前代の人人をいふ。【三】遺

作 經營に同じ。【三】丞相、李相公を指す。

【題義】李相公は、原注に逢吉とある。李逢吉は、徹底の小人であるが、かくも數ば韓愈が詩を廢和した處を見ると、同年の進士たる關係ばかりでなく、その人、亦た聊か取るべきところが有つたのであらう。蕭家の林亭に就いて、樊汝霖は「蕭氏は、唐に在つて最も盛なり、瑒・嵩・華・復・僊・眞・傲・遇、凡そ八葉宰相、嵩の第は城南布政坊に在り、眞の第は城南永樂坊に在り、長安志に見ゆ」とある。ここのは、何處の第か分からぬが、林亭といふからには、郭外に在る別莊かと思はれる。この詩は、李逢吉が蕭氏の林亭に遊んで、詩を題せしに因り、それに和して作つたのである。

【詩意】君が蕭氏の林園に於けるは、さながら、當年の山簡が習家の池に於けると同じく、われこそ、その林園の主人といはぬばかりで、隨意に幽賞せられ、そして、蕭氏の前代の人人が之を經營した時を追想して、感慨に堪へられなかつた。今しも、その林園は、巖洞幽深にして、門扉盡く鎖ぢ、丞相みづから、此に遊んで、詩を作られたから、人も成程と思つたが、さうでなければ、その存在を知つて居るものは、幾人も無かつたであらう。

【餘論】名家の末が兎角振はず、その林園の荒蕪に歸するは、毎毎見るところで、詩は平凡であるがさすがに感想盡きざる底の趣がある。

奉和杜相公太清宮紀事陳誠上李相公十六韻

杜相公が太清宮事を紀し誠を陳べ、李相公に上る十六韻に和し奉る

未相興<sup>二</sup>姫國<sup>一</sup>。輜櫟<sup>二</sup>建夏家<sup>一</sup>。

未相、姫國を興し、輜櫟、夏家を建つ。

在功誠可尙<sup>二</sup>於道詎爲華<sup>一</sup>。

功に在つては誠に尙ふべく、道に於ては詎ぞ華と爲さむ。

象帝威容大<sup>二</sup>仙宗寶曆除<sup>一</sup>。

象帝、威容大に、仙宗、寶曆除かなり。

衛門羅戟槩<sup>二</sup>圖壁雜龍蛇<sup>一</sup>。

門を衛つて戟槩を羅ね、壁に圖して龍蛇を雜ふ。

禮樂追尊盛<sup>二</sup>乾坤降福遐<sup>一</sup>。

禮樂、追尊盛に、乾坤、福を降すこと遐かなり。

四眞皆齒列<sup>二</sup>二聖亦肩差<sup>一</sup>。

四眞皆齒列し、二聖亦た肩差す。

陽月時之首<sup>二</sup>陰泉氣未牙<sup>一</sup>。

陽月時の首、陰泉氣未だ牙さず。

殿階鋪水碧<sup>二</sup>庭炬坼金葩<sup>一</sup>。

殿階、水碧を鋪き、庭炬、金葩を坼く。

紫極觀忘倦<sup>二</sup>青詞奏不譁<sup>一</sup>。

紫極、觀て倦むを忘れ、青詞、奏して譁ならず。

噌吰宮夜闌<sup>二</sup>嘈囂鼓晨趨<sup>一</sup>。

噌吰として、宮、夜に闌き、嘈囂として、鼓、晨に趨つ。

襲味陳奚取<sup>二</sup>名香薦孔嘉<sup>一</sup>。

襲味陳ねて奚ぞ取らむ、名香薦めて孔だ嘉し、

垂<sup>二</sup>祥紛可錄<sup>一</sup>。俾<sup>二</sup>壽浩無涯<sup>一</sup>。

祥を垂れて、紛として錄すべし、壽をして、浩として涯

貴<sup>二</sup>相山瞻峻<sup>一</sup>。清<sup>二</sup>文玉絕瑕<sup>一</sup>。

貴相、山、峻きを瞻、清文、玉、瑕を絶つ。一なからしめん。

代<sup>二</sup>工聲問遠<sup>一</sup>。攝<sup>二</sup>事敬恭加<sup>一</sup>。

工に代つて聲問遠く、事を攝して敬恭加はる。

皎<sup>二</sup>潔當天月<sup>一</sup>。葳<sup>二</sup>蕤捧日霞<sup>一</sup>。

皎潔たり天に當るの月、葳蕤たり日を捧ぐるの霞。

唱<sup>二</sup>妍酬亦麗<sup>一</sup>。俛<sup>二</sup>仰但稱嗟<sup>一</sup>。

唱妍にして酬亦た麗、俛仰して但だ稱嗟。

【字解】

【一】未相興姫國 史記周本紀に「周の后稷、名は弃、堯擧げて農師となし、邵に封じ、號して后稷といふ、別姓姬氏」とある。未相は帥帥等の農具。【二】輜櫟建夏家 書經に「禹曰く、予四載に乘す」とあつて、孔安國の傳に「水には舟に乗り、陸には車に乗り、泥には輜に乗り、山には櫟に乘る」とある。又史記夏本紀に「泥行には輜に乗り、山行には櫟に乘る」とある。輜は輜、櫟は櫟。史記の注に「孟康曰く、輜は、形、箕の如く、泥上を擡行す」とあり「如淳曰く、輜車は、謂ふ輜を以て推頭の如くし、長さ半寸、これを履下に施し、以て山に上つて墜跌せざるなり」とある。輜、即ち輜はそり、輜、即ち輜はがんじき。禹は、輜やがんじきに乘つて、天下を歴巡し、洪水を平らげて夏國を建設した。【三】距爲華 決して花らしいことではなく、極めて地味な仕事である。【四】象帝 老子が帝號を追贈されしことをいふ。【五】仙宗 仙道の宗祖。【六】寶曆除 長生不死をいふ。【七】戟槩 ともに矛。【八】四眞 舊唐書玄宗紀に「天寶元年、親ら玄宗皇帝を新廟に享し、莊子を以て南華真人となし、文字を南華真人となし、列子を冲虚真人となし、庚桑子を洞虚真人となし、四子著はすところの書、改めて眞經と爲す」とある。【九】齒列 その中に這入つて列する。【一〇】二聖 玄宗、肅宗、二帝の像を云ふ。雍錄に「初め太清宮成るや、工に命じ、太白山に於て白石を採り、玄宗の眞像、哀冕の服を爲り、當殿南面、玄宗、肅宗は左右に侍立し、皆朱衣朝服」とある。【一一】陽月 曆禮に「十月を陽となす」とある。律詩 奉和杜相公太清宮紀事陳誠上李相公十六韻

【三】未牙 牙は芽に同じ、きざさぬ。【四】水碧 寒水石の碧色なるをいふ。【五】拆金蕊 黄金色の花が開いた如くである。【六】紫極 舊唐書玄宗紀に「天寶二年三月、天下諸郡の玄宗廟を改めて紫極となす」とある。【七】青詞 神に奏する詞、即ちのりと、辭注に「宋の景靈宮天興殿、祝するに青詞を以てし、薦むるに酒果を以てす、唐制を用ふるなり、今に及びて尙ほ之を用ふ」とある。【八】增吹 門扉の開く音の高きをいふ。文選長門賦に「聲增吹而似鐘」とある。【九】喧嘩 鼓聲の高きを云ふ、文選東京賦に「奏三殿鼓之喧嘩」とある。【一〇】晨鐘 鐘は敲くこと、魏志に「兩衛、流陽鐘磬を爲し、寢殿して前む」とある。【一一】嬰味 清淨ならぬ物、禮記の郊特牲に「敬て美味を用ひて多品を費ばす」とある。【一二】貴相 杜相公の風貌、自ら貴きをいふ。【一三】代工 書經に「天工、人、其れ之に代る」とある、其字面を用ふ。【一四】聖明 御機嫌を奉伺する。【一五】攝事 論語に「官事は攝せず」とある、其字面を用ふ。【一六】當天月 下の捧日假と同義、天日は以て君に喻へ、月假は以て臣に喻へ、即ち杜元穎を指す。【一七】葦蕩 葦蕩として茂る貌。【一八】鳴榔亦麗 李杜二相公の唱和をいふ。【一九】稱感 感歎に勝へぬこと。

【題義】 一本に題を杜相公太清宮十六韻紀、事陳誠上李相因和に作つてある、又原注に「杜は元穎を謂ふなり」とある。舊唐書杜元穎傳に「貞元の末、進士に登第し、穆宗即位、戸部侍郎承旨に拜せられ、長慶元年、本官を以て同平章たり」とある。太清宮は、老子の廟、當時道教の總本山であつて、朝廷からも随分尊崇された。舊唐書の玄宗紀に「天寶元年、陳王府の參軍田同秀上言す、玄宗皇帝、丹鳳門の通衢に見はれ、靈符を錫うて尹喜の故宅に在りと告ぐと。上、使を遣はし、函谷關尹喜臺西に就いて之を發し得たり、乃ち玄宗廟を大事坊に置き、親ら新廟に享し、九月、改めて太上玄元皇帝宮となし、二年、改めて太清宮と爲す」とある。唐は、元と李姓であるが、先祖に格別の人もなく、帝室としての威嚴を缺く處から、老子の本名を李耳といふを幸に、即ち自分の先祖といふことにし、因つて、かういふ事もあつたので、多分いささか智慮あるものが捏造したことであらう。李相公は、例の李逢吉。この詩は、杜元穎が敕命に依つて、太清宮の祭祀を奉仕し、その事畢りし後、事を紀し、誠意を陳べて、十六韻の五古を作り、宰相の上司に居る李逢吉に上つたから、これに和して作つたのである。

【詩意】 むかし、后稷は、犂鉞を手にし、専ら農事を務めて、周家を興し、禹は櫓に乗り、がんじきを穿いて、天下を巡り、勤苦の餘に洪水を治めて、夏の基を建てた。后稷といひ、禹といひ、その功績の上から云へば、まことに尊ぶべきものであるが、道の上から見れば、地味で花らしくもない。ここに、わが老子は、帝位を追贈されただけに、威容洪大、その上、仙家の宗祖として、長生不死を得られ、寶曆遙にして算へることも出来ない位。太清宮は、即ち老子の廟であつて、門には警護の兵卒が居て、矛を並べ、四壁には龍蛇を畫いて、いかにも神らしく、且つ嚴かである。すでに禮樂大に行はるる清時に方つて、追尊の盛儀を行はれ、その神靈は乾坤に行き互つて、隨處に福を降し、莊文列庚の四人も、真人を贈られて、これに陪列し、玄宗・肅宗二帝の像は、肩を並べて左右に侍立して居る。十月は、時の初といふが、地下に於ては、陽氣が未だ兆さず、従つて、寒冷を覺える位。殿階には、碧色の寒水石を敷き詰め、庭上の炬火は、黄金色の花が咲くかと疑はれる位。名さへ紫極といふ位。

で、その森邃なるは、觀ても、倦むことなく、壇前に讀み上げる青詞は、聲高らかではあるが、決して、諱しくはない。夜なほ暗きに、宮門の扉は、嘯呖として、鼓の音が嘈囂として打ち出せば、やがて、朝になつた。清浄ならぬ物は、もとより供へぬことにしてあるし、名香は、薦むるに尤も善いとしてある。かくの如く、祭祀が行き届いて居るから、神靈も、自然感應し、祥瑞を垂ることは、紛として餘ありと爲すべく、又民人の壽命をして無窮ならしめるであらう。今次、祭事を奉仕した杜相公は、相貌堂堂として、山の峻なるを仰ぐが如く、自ら其事を紀述された詩章は、鑿朗透徹、玉の如く、一點の瑕だにない。杜相公は、天子に代り、老子の神靈に向つて御機嫌伺ひをなし、祭事を攝行して、恭敬愈よ加はり、たとへば、天に當る月の皎潔なるが如く、日を捧ぐる霞の葳蕤たるが如く、天子の御代拜として、物ごとに、聖意を奉體し、愈よ見事に遣つて退けられたのは、まことに恐れ入つた次第。そこで、李相公との唱酬を拜見すると、いづれも妍麗であつて、文彩爛斑、目もあやなるばかり、かく申す某は、俯仰の餘り、唯だあつと云つて感ずるのみである。

【餘論】この篇は、すべて三段より成り、起首より二聖亦肩差に至るまでの十二句は、太清宮の莊嚴なることを紀し、陽月時之首より俾壽浩無涯に至るまでの十二句は、今次の祭祀を紀し、以下八句は、杜相公の詩を作つたことを紀し、層層遞下して、段落も分明である。蔣之翹は「これ老杜、洛城關、玄元皇帝廟」の詩と竝んで、壯麗を具ふ、しかも、その典雅に如かず」といつて居る。参考の爲に、その杜甫の詩を下に擧げることにする。

配極玄都闕。憑虛禁籟長。守祧嚴具禮。掌節鎮非常。碧瓦初寒外。山河挾繡戶。日月近彫梁。仙李盤根大。猗蘭奕葉光。世家遺舊史。道德付今王。畫手看前輩。吳生遠擅場。森羅移地軸。妙絕動宮牆。五聖聯龍袞。千官列雁行。冕旒俱秀發。旌旆盡飛揚。翠柏深留景。紅梨迴得霜。風箏吹玉柱。露井凍銀牀。身退卑周室。經傳拱漢皇。谷神如不死。養拙更何鄉。

朱竹垞も「宏麗精密。絶だ少陵に似たり」と云つて居る。



終